

何にも山本さん平生の好みとは似ても似つかぬで、こゝくしたものだと思つたが、果してこれは東京の大工とかに一切任せきりで出来たものだった。

それでも老人は得意になつて、これは何の木、あれは何の形など説明して呉れた。床の天井が萩の小枝であつて、同じ太さの眞直な萩をそろへるのは大變な苦心だったなどやつてゐると、丁度こゝに來合せて、つまらなさうに眞面目くさつた顔で坐つてゐた若い藝妓が、ふと老人の萩の話につりこまれて、思はず「萩の」何とかと歌ひながら坐つたまゝで踊りかけた。踊りかけて、はッと氣がついて、口をふさいであわて、四邊を見まはすと、これはしたり、町長さん、校長さんを始め、一同やかましい顔でぢろく女の方を見てゐた。その時の女のきまりの悪さうな顔が、今思ひ出しても吹き出したくなる。

三 佐渡の流人

源義經が佐渡に流されたといつても、恐らく何人もほんとうにはしまい。ほんとうにはしまいが、事實流されてゐる。たゞそれは九郎判官源義經でなくて、前兵衛尉源義經であるだけの違ひだ。彼は延暦寺の僧を殺した廉で安元二年十一月に佐渡へ流された。こんな紛らはしい同姓同名が入り交るほど、佐渡の流人には色々の人があつた。

聖武帝の神龜元年に伊豆、安房、常陸、佐渡、隱岐、土佐を遠流の地と定めて以來、東山帝の寶永年間に至るまで、こゝに流された者その數何百といふことを知らず、中にも源平以後に及んで、文覺あり、日蓮あり、冷泉爲兼あり、日野資朝あり、名は遷幸と申しながら、やはり配流の御身となられた順徳上皇のあつたことは、とりわけて人の耳に新しい。

一世の荒法師文覺がこゝに流されて、齡既に傾き、餘命幾ほどもないのを知つて「わがなからん後跡を人間にけがされんことを安からね」とて、飛んでもない山の奥の方へ引ッ込んで死んでしまつたことは、さすがに文覺らしい。

爲兼が佐渡へ渡る途中、越後の寺泊で、遊女初君と相知り、別に臨んで初君が参らせた歌「物思ひこし路の浦の浦波も立ち歸る習ありとこそきけ」と言つた豫言が中つて、配流中歌ばかり作つてゐた爲兼が間もなく赦免になり、初君の歌は勅撰集に入れられた。同じ流人でも、こゝらは大分みやびやかに出来てゐる。

日野中納言資朝は高時の爲にこゝに流されて、こゝで斬られた。その子阿新、年わづかに十三のいたいな身ではる／＼父を尋ねて、京からこの島に來り、父朝臣のあづけられた本間山城入道が館にたどりつきながら、一目父と相見ること許されず、資朝斬られて後、思ひ餘つて入道を殺さうとして殺し損ひ、わづかに父を斬つた本間三郎を親の仇の片われと打ちとつて、こゝを逃げ出した。その阿新が三郎を殺して後一夜身をひそめたといふ、阿新の隠れ松といふのが、眞野の妙宣寺の側にある。戦國の習とはいひながら、何等の悲壯と、見たばかりで涙ぐましくなる。

もし夫れ日蓮に至つては、さすがに一代の快僧、彼が一生を佐前佐後に盡した位、佐渡の遠流は彼に意義あるものであつて、流されてむしろ光彩を添へた。佐渡御勘氣鈔の初に、「九月十二日に御勘氣を蒙つて、今年十月十日佐渡の國へまかり候ふなり」とそも／＼書き出しから、元氣がいゝ。「かゝる目にあひ候ふこそ、法華經を讀むにて候ふらめと、いよく信心もおこり後生もたのもしく候ふ。死して候はゞ、必ず各をたすけたてまつるべし」とて、天を恨みず、人を怨まず、一向平氣ですましてゐる。最後に「いたづらに朽ちん身を法華經の御故に捨てまらせんことこそ、あに石に金をかふるにあらずや。各なげかせ給ふべからず」と死に面して従容として、一杯機嫌で氣焔を上げてゐるやうな事を言つてゐる。

「日蓮法師御勘氣の事免許する所あり文永十一年二月十四日」といふ簡潔極まる赦免狀が日蓮の手に届いたのは、三月八日の夜半であつた。これを届けた弟子日朗は、日蓮が四年の配流の間に、八度も佐渡に日蓮を訪うてゐる。日蓮が佐渡に渡る時は海が荒れ、佐渡から歸る

時も海があれで、船が寺泊に着きそこなつて、柏崎に着いた。かう荒れたところも、あの元氣のいゝ坊さんにはふさはしい。

神龜以來流人も色々あつた。その色々あつた中に、その最も悲惨を極めたのは、たれが何と言つても、わが承久の帝順徳院に過ぎたるはあるまい。

四 眞野御陵

阿佛房で暮れかゝつた日は、眞野の御陵に暮れた。

月もない暗の坂道をひたもの登り行けば、間もなく木立物古りた御陵の前に着いた。どこでかふくろ、うがぼうくと鳴いてゐる。嘗てローマのコロシムを月の眞夜中に訪うて、言ひ知れぬ感慨に不覺の涙を落したことがあるが、今この静かな、人氣の絶えた、夜陰の御陵の前にぬかづいて、速くその昔を思ひ起すと、泣くまいとすれど涙が出て来る。見れば、我

より先に人があつて、暗の中にすゝり泣きをしてゐる。たれかと思つたら、世界のたれよりも泣きさうでない友のIであつた。二人はたゞ無言のまゝで、暗の中に相對した。

こゝへ来るまでは、かうまで感傷的にならうとも思はなかつた。来て見て、こゝが一天萬乗の尊き御身の恨を呑んでゆかれた遺骸を火にした所と思ふと、もう堪らなくなつた。

今さら承久の昔を語らんもかしこし。後鳥羽土御門の二上皇と共に、兵を擧げて時の執權北條義時の暴逆を懲らしめ玉はんとして、事成らず、義時の爲にこの佐渡に遠流の身となられたのは、御年二十四の時であつた。その以來いぶせき黒木の御所に樂しからぬ日を送らせ玉ひ、その末遂に『思ひきや雲の上をばよそに見て眞野の入江にくち果てんとは』の御製に千萬無量の思をこめて神さりました玉ひしまで、その間二十二年の永い月日であつた。

寺泊までは供奉の人々も少くはなかつたが、出雲崎に打ち寄する荒波に恐れをなして、一人減り二人減り、佐渡まで御供申し上げたのは、右衛門佐局以下奥丁三人きりだつたとい

ふ。(この奥丁の一人の末が、今尚眞野の御手植の石柙梅の側に住んでゐる) これらが眞野の浦に着いた時、「こゝは漁夫の住家のみなれば、玉體を寄せらるべきやどりもなく、むくつけき男ども來りて物いふこと聞し召すにも、これなん音に聞く眞の鬼なるべしと御心をなやまされ」云々と、佐渡風土記にあるを見ても、御心細かつた様は察せられる。

かくて佐局以下をお相手に、御不自由がちな、味氣ない月日を送らせられたが、その間も島の人々は北條氏をはやくつて、自からよそくしいそぶりをお見せ申したらしい。一二年の島の住居にだに飽きくするものが常なのに、二十餘年かういふ様でおはした御心の中のもだえはどんなで有つたらうか。

崩御と申してもほとんど御自害に近かつたと傳へられてゐる。明けても暮れても何の樂もおはさぬところへ、都では北條氏がますます勢をほしいまゝにして、還幸の御望もほとんど絶えた。仁治三年の秋に至つて、わざと數日供御を召されずして、終を急がれ、その衰へ玉

ふに及びて、存命はなほだ無益として、石を焼きて、ひそかに折しもの御腫物にあてなどし玉うたとある。崩御になつて後も、遠流の御身とて佛事は行はれなかつた。われら二人がしんみりと相對してゐるところへ、どやくと後ればせに同行の人々が登り着いた。中に佐渡新聞の主筆石井佐助君あり。篤學の方と見えて、眞野の歴史を語ること詳細を極めた。

あゝ思へばわれらはよい月日の下に生れた。

——大正十四年五月「東京朝日」——

三等特急に寄せて

その他
金三銭の迷信
原稿用紙
貧乏自慢
身元保証と紹介

うらくくと春近き日ざしかな

三等特急に寄せて

上 寝る稽古

東海道に三等の特別急行列車が出来たと聞いて、一度乗つて見たいとは、かねて思つてゐたが、とんとその折がなかつた。

自分が斯く三等特急に興味を持つたのは、たゞ物ずきばかりでない。特急には座席を定めることの出来る規則になつてゐるから、それさへ出来るなら、何も一等車や寝臺車に乗る必要はないと思つたからである。もつとも三等が自分の身分相應であることも、理由の一であることは言ふまでもない。

私は三等主義である。あるひは無階級主義である。出来るものなら、一切の階級を廢して

全部三等賃金の一等車ばかりにしてもらひたいぐらゐに思つてゐる。それでゐて、時々一等に乗るのは、人並らしく自分の職業上の體面を或る場合には繕ふ必要があるのと、今一つは二等車の乗客に兎角無作法ものが多くて、列車の給仕までが二等車の乗客を馬鹿にしてゐる者が多いのを避けんが爲とである。

寢臺車にしても、私は何も一晩や二晩ぐらゐの汽車旅行に、わざ／＼寢衣に着かへて、ぬく／＼と寝なければならぬとは思はない。殊にわが日本の寢臺車は不愉快千萬なもので、終夜あか／＼と明るい電燈をつけ放して、人の寢静まつた眞夜半頃でも、どたんばたんとドアの開閉に無遠慮な大きな音をさせる奴がある。乗客は人の迷惑もかまはず夜ふくるまで大きな聲で高話してゐるかと思ふと、朝は又洗面所のかみ合ふのを恐れてか、馬鹿に早起をして餘人のまだ寢て居るのもかまはず、大聲で話す人が多い。決して樂々と心持よくねれるところでない。それにも拘はらず、私が寢臺車を取るのは、たゞ定つた座席がほしいばかりで、

その外何の望もない。

その點になると、アメリカのチェア・カーは氣がきいてゐる。一人づつに一つの椅子があてがはれて、座席の取り合ひをする必要も何もない。いざ寢ようとなれば、眞直に立つた椅子を、斬髪屋のそのの如く、緩い勾配に傾ける。着のみ着のまゝで、樂々と脚を踏み延ばして寢られる。夜がふけて大抵の人が寢しづまつた頃には、列車の給仕がちやんと電燈を暗くしに来る。若し日本にこのやうなチェア・カーがあつたら、私は何を苦しんで窮屈千萬な寢臺を取らうぞと、始終憤慨してゐる。

憤慨のついでに、今一つ憤慨せしめよ。

全體われ／＼日本人は兎角寢ることが下手だ。幾百年來晝間は疊の上に坐り、夜は蒲團を敷き延べて寢るに限つたものと心得てゐるから、寢るとさへ言へば、必ず枕をして脚を踏み延ばして寢なければならぬことになつてゐる。實際、晝間何貫といふ全身を兩脚に載せて坐

つてゐた身には、かゝらなければほんとうに休まらぬのだらう。その後西洋の物が入つて来て、坐る代りに椅子といふものが用ひらるゝやうにはなつたが、その又椅子といふのが、大抵の場合、腕のない、腰の高い、背中の眞直な、尻を下すところにバネも何もない堅い／＼籐の編み合せに過ぎない、お粗末な安直椅子なのだから、これを正座に比して、足は少し休まるかも知れぬが、腰や尻は決して休まらぬ。だからふつくらしたクッションのついた、腰の低い、いはゆる安樂椅子に安樂にその身を埋めて、そのまゝ寝てしまふといふ妙味は今に解しない。それを解せぬから、椅子によりかゝつて寝るなどは以ての外で、汽車の中でも、公園のベンチでも、乃至は寄席の眞中でも、長々と横になつて寝なければ、眠れもしないし、寝た氣もしない。それが爲に他人の座席をふさがうが、他人を立たせたまゝで置かうが、頓着してゐられないのである。悪い癖だ。

悪い癖だけならいゝが、全體他人の前で脚をなけ出して寝そべるといふは、無禮千萬な話

である。靴の裏を人に見せるのさへ失禮と認められた國がある。日本でも作法の正しい家では、他人の前で足を出して横坐りに坐るのさへ、不行儀と認められてゐる。それがどうでせう、汽車の中となると、大勢の前で寝そべることが無禮とも何とも思はれてゐない。だから出来るだけ横になつて寝られるだけの座席を取らうとあせる。

座席がちやんと定らぬ爲、これを逸早く取らうとする努力が、どれほどわが國民の心を險惡に導いてゐるかを考ふる時、座席は座席だけの小問題に非ずして、ゆゑしき國民道德の問題である、寒心に堪へない。三等急行の出る時、開札口に山なす人数が押しかけて、改札がすむが早いか、我一と列車に向つて駈け出す。あんなせか／＼したことをしなければならぬ國に、おちつきのある國民が出来るものでない。若し駈け出すのがいやなら、赤帽に毛布をもたせて、豫じめ二三人分の座席を占領させておかなければならぬ。全體旅行に毛布を持つて歩かなければならぬといふのが、既に文明國にはあるまじき馬鹿々々しさであるが、そ

れはしばらく措くとして、あの毛布で客車の中に占領地帯を作つて隣人の侵入を防がなければならぬやうに出来た日本の列車は、たしかに國民に暴力占領を教へ、隣人排斥を教ふるものである。座席問題が國民道德の問題だといふのは、こゝです。

それが若し三等特急に座席が定つてゐて、改札口から競走をするに及ばず、赤帽に命じて占領地帯を作らしむるに及ばずとならば、少くとも私にとつては、一等もいらぬ、寢臺もいらない。それを見定めんが爲に、私はかねてより三等特急に乗つて見たかつた。

下 米を知らぬ米食國民

その望が叶つて、私は大阪からこれに乗る機會を得た。

乗つて見て失望したのは座席のないことであつた。特急券を買ふ時に、座席は指定せず客車の番號だけ指定してある。指定された番號の客車に乗つて見ると、私は辛うじて席に着

き得たが、着き得ずして立つてる人が三人も四人もあつた。それを列車給仕がどうするといふでもなかつた。これでは特急券の座席指定が全く無用である。

最も重きを置いた座席の定らぬ一事は、すこぶる私の氣に入らなかつたが、併し三等特急には、他の急行車に見られぬ愉快もあつた。

第一にプラットフォームの送迎がほとんどない。今度仙石鐵道大臣の就任以來、送迎禁止を斷行せんとして、目下各地方鐵道局の意見を徴してゐるさうだが、そんなものは今更徴するまでもない。思ひ切つて一擧にやめてしまふがよい。四五年前、送迎の人数を制限せん爲、入場券の値上を行つた時、私はその愚策なることを腹の中で笑つてゐた。入場券をいくら引き上げたからとて、それにおびえて引ッ込むやうな見送り出迎へでは決してない。われらにしても、入場券が高くなりましたから、これで御免を蒙りますといつて、改札口から引きさがれるものでない。高ければ高くなるほど、尙奮發して氣前を見せてやりたくなるのは、人情

である。二銭が五銭になり、五銭が十銭になつたところで、どうあらう。果して送迎の人数は二銭の時も十銭の時もかはらない。これが大勢プラットホーム一杯に埋まつて、肝腎の乗客の往來を妨ぐることに甚しいのは申すも愚かや、時にはイェルを合唱し、萬歳を唱へ、歌を歌つて、その騒がしいこと一通りに非ず。この送迎の最も多いのは、夜行の一二等急行の出る時で、この時は日本中の馬鹿が集まるものと心得て居れば、よろしい。そのうるさい、馬鹿々々しい送迎が、三等特急の時にほとんど全く見かけぬといふのは、何たる會心の事ぞや。私は先づこれでせいしくした。

列車におちついて見ると、三等乗客といふものに無作法者は一人もなかつた。右も左も身なりこそ綺羅は飾つて居らぬが、互に遠慮し合つて、譲り合つて、助け合つて、いづれも一廉の紳士の作法を心得てゐる。それに一二等には滅多にないことだが、四隣近處、互に睦まじく話し合つて、いつしかだんぐりに打ち解けてしまふ。つんとすまして、東海道五十三次

の間一言も口を利かすにおし黙つてゐるのを紳士道と心得た一二等の乗客とは大變な相違である。物質的には知らず、精神的には、たしかにこの種の階級が日本の精髓となつてゐる。日本を背負つて働いてゐる者はまさしく彼等だ。日本の商業も工業も、その末梢機は彼等の手に在る。日本が今日の大を成した所以の三大戦争も、彼等が戦つてくれたのであつて、大山大將でも野津大將でもない。一言にしてこれを覆へば、日本の文明の樞軸となつてゐる者は、遊手無食の貴族富豪でもない、大きな顔ばかりしてゐる高位大官の徒でもない。一にこの作法正しい中流若くはその以下の民だ。三等乗客とさげすんでは罰が當る。

時分になつて、自分は食堂に行つて見た。値が安いだけに食ふ物はまづいが、窓に向つて腰掛をしつらへた三等食堂は、うつりかはり行く窓外の山河を目にしながら、食事が出来る。殊にその食事が日本食なのも心地がいゝ。結構な日本服がありながら、禮服といへば不恰好な洋服に限るものゝやうに心得られた日本、結構な日本語がありながら、ババさんのママ

さんだのと子供に言はせて喜んでゐる日本では、結構な日本食がありながら、何かといふと直ぐ洋食を食はせたがる。又食ひたがりもする。しかもそれは大抵西洋の田舎の料理屋にでも出て来るまづいゝ洋食だ。魚肉はフライに限り、肉は焼き過ぎたビフテキに限り、これに未練たらしく米の飯が食ひたさのライスカレーがついて来る。皿は幾度かはつてもナイフとフォークとは同じもので、汚れたまんま間に合はさせられる。給仕を呼ぶには、卓子をナイフの尻で叩かなければ、ふりむいてもくれない。あんな殺風景な給仕の呼び方をしなればならぬ處は、世界中さがし歩いてても日本の外にはあるまい。そのくせ食後に食堂で煙草を吸はうとすると、キツと小言を食ふ。窮屈なアメリカ風のはき違へである。その不自由にして不愉快なること日本の洋食に過ぎたるはなし。食はせる方では、日本料理ほど手数がわからぬから、それでもよからうが、何でこんなものを日本人が喜んで喰ふのか、自分には合點が行かない。恐らくはこれもアメリカ風のはき違へであらうか。それから見ると、三等列

車の食堂が日本食を本位にした點は、すこぶるわが氣に入つた。

氣に入らぬことが一つあつた。値が安いから食事のまづいのは覺悟の上であつたが、それにして、飯は思ひ切つてまづいものであつた。粒の大きな、甘味のない、しかもびちや／＼飯と來てゐる。おまけに蓋の中で冷えかけて、ほた／＼としづ／＼がたれるに至つては正に容すべからず。この日だけかうまづい飯をくはせたのか、いつもこの通りなのか、それは私に分らぬ。しかし米に關しては無關心な手合の多い日本では、いつもかうなのぢやないかと疑はれる。

日本人は米を食つて生きてゐながら、何とてかくまで米に對する知識と趣味とが缺けてゐるのであらうか。第一米の事は小學校でも中學校でも全く教へない。中學校の生徒で、早稲だの晚稻だのいふ名前も知らない者がざらにある。こんな風だから、女學校を卒業して一家の主婦となつたハイカラがりの細君が、牛肉のロースとヒレの別は知りながら、米を手の

掌へのせて、それがまじり気なしの日本米か、又は外國米のまじつたものであるかを見分け得る者はまづない。それさへ見分け兼ねる位だから、それがいゝ米か悪い米か、旨い米かまづい米か、に至つては、とても見當のつくものでない。一家の主婦が米の善悪を見分けられぬやうな不具な教育を、日本はしてゐるのである。(もつとも日本の教育といふは、大部分無用の事ばかり教へてゐるのだが)

米の善悪さへ知らぬくらゐだから、米の調理法に就ても、一向頓着しないのは自然である。一年三百六十五日毎日必ず炊かなければならぬ米でありながら、小石を嚙むやうに硬い飯も出来れば、お粥のやうなびちや、飯を作ることもある。少し米がかはつて水加減火加減をかへなければならぬとなると、きつとしんのある飯が出来るか、底の方をこけつかせるに定つてゐる。私人の家でこれあることは怪しむにもおよばぬが、飯を商賣にしてゐる宿屋や料理屋にさへ、まづい飯を平気で食はせるには驚く。田舎の料理屋などでは、飯は料理の中に

數へてゐないらしい。鐵道の停車場では、毎朝驛賣の辨當に對して嚴重な検査を行ふが、米に對してはあまり嚴重に行はぬものと見えて、ひどい米を食はせる驛が時々ある。恐らく食堂に對しても、料理の品數や代價に就いて、鐵道當局はやかましく言ふが、米のことは言はないのだらう。もつと適切にいへば、米は當局にも分らぬのではあるまいか。

それほど米が閑却されてゐて、それで米を常食とする豊葦原の瑞穂の國の民とある。

——大正十三年九月「改造」——

金三錢の迷信

○ 郵便切手を封入して来て、手紙の返事を求める人がある。何といふ無禮。

○ わづかに金三錢の切手でないか。三錢の金を吝んで、おれが出すべき返事も出さずにおくものと思つてゐるのだらうか。それとも、たかゞ三錢の金をおれに使はせては相すまぬとも思つてゐるのだらうか。三錢よりも今少し貴い時間をおれにつぶさせてゐることはどうして呉れる。

○ 金三錢だけの度胸を見せて、おれに是が非でも返事を出させようとする心が憎い。返事を出す必要のあるものかないものか、返事を出さぬのが失禮に當らぬかどうか。そんな事ぐらゐはおれも知つてゐる。おれもそれくらゐのことを辨別するだけの年は喰つてゐる。

○ 一體禮儀といふものは、人の自由意思を尊重するところに在る。英語で You が will で I が shall なのもそれが爲だ。自由意思を認むる所以、即ち人格を認むる所以と、今さら聞き直つていふまでもないが、世にはこれを穿き違へて、無理を強ふることを禮儀の如く心得てゐる人がある。

○ 人を尋ねて、歸らうといへば、無理に引き留めてかへさぬ。宴會に招かれて飯をもらひたといへば、まだお早いと酒を強ひる。暑い時は、お羽織をお取りなさいとて、取らせずん

ば已まぬ。一人で歸らうと思へば、是非お見送りをとて、人のいやがるのもかまはず尾い來る。玄關で用をすませて出て行かうとすると、無理に引き上げて、無理に座敷に請じて、無理に茶をのませて、無理に菓子を食べさせる。うっかり食はずに居ると、主人がわざ／＼箸でつまんで菓子を取つて呉れて、何が何でも食はせようとあせる。

○
しかし世には「遠慮」と稱して、腹にもないことばかり口にする一種の禮がある。如何さま片方で遠慮するのが禮となつて居れば、片方でこれに對して無理強ひが禮となるのは、自然の勢か。だが併し、それは相手による。遠慮の禮儀を心得た人に對しては、無理強ひが禮儀にもなりましょうが、おれのやうな遠慮を知らぬ人間に取つては、禮儀どころか、以ての外は無禮に當る。

實際金高は僅に三錢だが、この三錢の切手を封入した手紙を受け取つた時は、全くもてあます。自分は他人から手紙の來た時、切手の封入があらうがなからうが、つとめて返事を出すことに定めてある。しかし、返事の必要のない時か、又は返事のしやうのない時は、たとひ切手が封入してあつても、決して返事は出さない。往復はがきで愚にもつかぬ質問をよこす雑誌に對しても、やはりその傳でやつてゐる。その場合にこの返信用のはがきと封入の切手の始末が困る。

○
昔小山某といふ代議士が何かの議案に賛成する約束で賄賂を取つておいて、その約束通り賛成をしなかつた。後に裁判所で調べられた時、賄賂を取つておいて約束を守らぬのは、世の中に賄賂の無用を教へて、賄賂の絶滅を期する所以であるとか、何とか、どえらい氣焔を吐いたことがある。小山の賄賂論とてその頃やかましかつた。自分はこの傳で切手はもらつ

でも、必ずしも返事はしない。これが切手封入の無禮を教へて、切手封入を絶滅させる所以と信じてゐる。

○
しかしかゝる場合に何となくすまぬやうな氣もする。たゞ三錢の問題ぢやないかと、われとわが心を叱りながら、ともすれば背任冒認の罪を犯したやうな氣がしてならない。考へて見ると、三錢の小さな金額でありながら、これほど容易に人の心に重荷を背負はせて、これほど有効に人の自由を束縛し得るものは滅多にない。切手一枚の爲にいふべからざる壓迫を感ずる。そこが金三錢の迷信である。

○
切手といふものに、われ／＼は一種他に求められない愛着心を持つてゐる。畏れ多くも皇室の御紋章が刷り出されてある爲でもあらうか、又は三四錢の價に不相應な偉大な用事を勤

めて呉れる爲でもあらうか、又は貧弱な小さな紙が三錢にも四錢にも通用するといふのが、これに尊嚴を與へる爲でもあらうか。兎に角われ／＼は切手に對して、その價格以上の敬意を拂つてゐることはたしかだ。他人から來た手紙の郵便切手に、誤つて消印がかゝつてゐない時、多くの人は大變な拾ひものでもしたやうな氣になつて、丁寧に湯氣をかけて引きへがさうとするのを見ても察しられる。平生三錢四錢の金には目もくれず「おつりならいらぬよ」と、後もふりむかずに出て行く底の人が、消印のかゝらぬ郵便はがきを受けとつた時、これが切手ならといふやうな、恨めしさうな顔をして執念く見つめてゐることがよくある。これが即ち切手の迷信である。

○
この迷信から切手は異常のえらいものに見なされてゐる。「規則書入用の者は郵便切手封入御申込あれ」と學校がいへば、「目錄は切手封入御申込第贈呈」と書物屋がいふ。新聞

社では、投書の返却を望む者は前以て切手は封入しおけと斷わり、アメリカの或る記者の書いた投書心得ともいふべきものの中には、かういふ時封入する切手は必ず耳のあるものを選び用ふべしと注意してゐるのを見たことがある。宿屋に泊つて、よく景物に繪はがきは呉れるが、切手の貼つたのはめつたに見たことがない。硯函の中に旅館の名前を刷り込んだ状袋は必ず備へてあるが、切手を貼るか、又は旅館で切手を貼つて出して呉れるのは、自分の知つた限では、今までにたゞ一軒しかなかつた。それほどにどこでも切手を惜しがる。

○ 旅館の繪はがきや状袋に一々切手を貼つて出したとて、何ほどの費用がかゝらう。僅の費用でお客はどれほど心持をよくするか知れない。のみならず、切手があれば、お客の方では出さなくてもよい手紙でも、つい出して見る氣になつて、結局は旅館のいゝ廣告になる。

○ 學校にしても、書物屋にしても、いやしくも先方がそれ〴〵郵便料を拂つて照會して來た以上、皆が皆まで物ずきやひやかしではあるまい。これに對して、先方が切手を封入するまでもなく、丁寧に、規則書なり、目録を送つてやれば、先方も喜ぶし、この方も廣告になる。アメリカ邊の商店や學校でははがき一本で、立派な冊子や目録を無料で送つて來る。それが當然であつて、それが一番賢明な宣傳である。

○ 新聞社にしても、日々幾十通の投書が來るか、大抵數の知れたものだ。假に一日五十通として、(特殊の事情のある時の外は、大きな新聞社でも、少くも日本では、一日に平均五十通以上來るものでない)そのうち返却を望んで來る者は、一割か二割に過ぎない。二割として十通。この十通を返すに要する郵便料は、第四種の二錢づつで二十錢。一年に見積つて僅に七十三圓である。愛讀者に對する好意としても、愛讀者外に對する廣告料としても安いものだ。

○
 餘事には相應氣前を見せる者でも、郵便切手となると、かくまでに思ひ切りが悪い。そんなままで郵便切手が恐ろしいものか。これが迷信でなくて何だ。この迷信を種に人をおどかしつけて、何か書かせようと強ひるが如きは、丸で賣僧坊主が寄進帳をつきつけるの類だ。無禮といふはこゝである。

—大正十四年一月「女性」—

原稿用紙

○
 近頃原稿を頼みに来る次手に、原稿用紙を送りつけて来る人がよくある。世にこれほど人を馬鹿にしたことがあらうか。

送りつける人の心は全體何を考へてゐる。原稿用紙を送つてやらなければ、書くに紙がなく困るだらうとの心づかひか。それならば大きにお世話も極まる。いくら貧乏しても原稿用紙を買ふ位の金は持つてゐる。平生あんまり原稿など書いたことのない人に向つて、原稿用紙の備へつけがあるまいとの懸念なら聞えてゐるが、はゞかりながら、おいらは原稿で飯を食つてゐる人間である。原稿用紙の備へつけがなくて、一日も立つて行かれるか。人を

誌社から送ってくるのは大抵これだ。それに四號ゴジックか何かで「何々雑誌原稿用紙」などは、差出がましいにも程がある。

○ 如何さま自分の社の原稿用紙を送つてこれに書いてもらへば、大きさが揃つて、行數の勘定がし易くて手數が省けるに相違ない。その手數を省かう爲に、くでもない原稿用紙を送りつけて來るのだらうが、生憎とこの方雜誌の手數を省かんが爲にとて原稿は書かない。

○ 原稿を頼んでおいて、一定の原稿用紙に書かせんとするのは、人をお客に招いておいて、一同に揃ひの冷飯草履をはかせんとするに似たり。

— 昭和三年二月「經濟往來」 —

貧乏自慢

○ 自分は子供に貯金をさせない。時々子供の貯金通帳に私の方から金をいれてやつておいて勝手に使はせる。すると妙なもので、子供は一向使はうとしない。この方から使へくと催促しても、も少したまつてからなどいつてすましてゐる。これでは私の趣旨が立たぬから、時には強制的に貯金を引きださせて使はせる。

○ 子供が自分でかせいで自分でまうけた金を貯金にするなら分つてゐるが、どうせ親からもらつた金をちびくためて貯金するなんぞは、二等車の旅費を受け取りながら、わざと三

等車かなんかに乗つて、幾分でもそのさやを使ひ残さうといふ、さもない小役人根性だ。子供にはどうして金をためるかを教ふるよりも、どうして金を使ふべきかを教ふるを良しとす。金はためなくても親がやる。それよりも親からもらった金を、どう使ふがいかと工夫もさせ、けいこもさせる方が、何より大事だ。

○

能く貯へ能く散すといふことがある。子供などいふものは、あんまり細かくくと育てると、貯へることばかり分つて、散ずる方が分らなくなる。散ずる方が分らないと、ためこみ一方のけち臭い人間になるか、又は他の極端に走つて、つまらぬ散じ方ばかりするやうになるか、どちらかだ。散じ方を知らないから、さうなるのは當然である。卑吝の人の子に蕩兒多しと、昔からいひ傳へられてゐるのは、何よりも明にこの事實を證明してゐる。子供には貯へるといふが如き消極的なことを教ふるよりも、如何にして散すべきかといふが如き積

極的のことを教ふべきである。私が兎角金ばなれが汚くて、友人からけちんぼ扱ひにされるのは、幼い時から貧乏な家に育つて、金を使はぬやうくと仕込まれた結果である。せめて自分の子供だけは、おツとりした金使ひの道を心得た者に育てあげたいと思つてゐる。

○

世には金を使ふといふことを左もく一種の罪惡の如く心得てゐる者があるが、如何さまむだなことに浪費濫費することこそ罪惡かも知れぬ、使ふべき場合と否とを見極めてその使ふべきに使ふのは、すべての動物中、人類のみが能くする美德だ。

○

金の貯へ方を教へて使ひ方を教へぬから、大人になつてつまらぬ金の使ひ方をする者が多い。それがため自慢にもならぬことを自慢したり、恥かしがるにもおよばぬことを恥かしがつてゐる。現によひごしの金は使はぬとて大得意になつてゐるところの江戸ッ子は、よく日

本國民を代表してゐる。けちくするなと一言いはれたら、ない財布の底をはたいても男を見せたがるのも、そのためだ、その當然の結果として、金に困ると、その困るのを何よりの手柄のやうに心得てゐるから、始末が悪い。

○
金がいくらたまつたと吹聴する人は滅多にないが、おれには借金がいくらあると自慢氣に吹聴し歩く人は多い。金が入つた、金がまうかつたと話す者は少いが、金を使つた、金が要つたと、大げさに吹いてまはる者はざらにある。宜なるかな、貯蓄銀行へ金をいれにくく時、さながら悪いことでもするやうに、こそくしと出かける者の多い事や。

○
貧乏を自慢にし、金の足りないのを自慢にし、借金の多いのを自慢にする國民の間に、我から無産政黨と名のるものゝ三つも四つも出てきたのは怪しむに足りない。無産者とはプロ

レタリアの譯語だらうが、原語の原意は「子供」の意味で、夫役に子供をだしたのから始まつたのださうだ。これから無産者を利かせたところに味がある。無産々々はあまりに露骨に過ぎる。自ら無産黨などと威張つてゐるのは、世界中に日本あるきりだ。米國のある新聞に『年二十にして天下をセーブせんことを思ひ、三十にして月給をセーブせんことを思ふ』といふのが出てゐるが、おあひにくさま、日本では月給なんどセーブせず、三十になつても四十になつても、天下をセーブせんと思氣こんでゐるのが大分ある。さういふ自分は貧乏して、いつになつてもセーブされる氣づかひなし。

○
茶代やチップに氣前を見せて、やらなくてもいゝところに金をやりたがるのが、日本人の癖だ。大洋通ひの汽船でも、外國のホテルでも、日本人はよく金をくれるとて、ボーイやスチュワートに評判がいゝ。私がドイツのある片田舎に行つた時、こゝの留學生は電車に乗つても

チップをやり、郵便配達が爲替をとける毎に金をやるので、郵便配達が日本の留學生に途中で出あふと、皆お辭儀をするとの話であつた。郵便配達にお辭儀をしてもらつて、得るところ幾文ぞやといひたくなる。かやうに詰まらぬ事に金をだしたがる者に限つて、肝腎出さなければならぬ寄附金とか租税とかになると、馬鹿に出ししぶる。

貯金の奨励も結構なことだが、使ふ方の奨励はより多く大事だ。金のいゝ使ひ道が分ればたれしも貯金をする氣になる。折角の貯金が低利資金の美名の下に、變な奴に變なことに使はれてゐると知れては、千萬言の貯金奨励もたれが本氣に聞いてくれよう。これをもつての故に、おれは子供に貯金なんどさせない。

—大正十五年十二月「東京朝日」—

身元保証と紹介

○ 「身元保証人になつて下さい。」

「あゝいゝとも。」

頼む方も簡單なら、頼まれた方も至極簡單に片づけてしまふ。非常に重大な事を頼むやうな心持で頼む人もなければ、非常に重大な事を引き受けたつもりで引き受ける人もあんまりない。頼まれたら大抵の人は「あゝいゝとも」と引き受けてしまふ。甚しいのになると、身元保証書の本文もしかと讀まずに、自分の實印を放り出して、勝手に押させる人さへある。

○

頼まれさへすれば何でもしてやることを、何よりの美德と心得てゐる多くの人は、紹介狀を頼まれると何枚でも引きうけて書く。相手が迷惑しようが、紹介して紹介したゞけの効果があがるまいが、そんなことには頓着しない。たゞもう書きさへすればよいことになつてゐる。自分のしかと知りもしない人を、自分のしかと知りもしない人に紹介するなどは、平氣なもので、初對面の人の爲にさら／＼と紹介狀を書いて渡すことさへ珍しからず。勇ましなんどいふばかりでない。

そんなに輕々しく書いて渡した紹介狀なればこそ、その紹介のき／＼目のないことも驚くばかりで、紹介狀を持つてゐながら、門前拂ひを食はされ、面會謝絶を申し渡さるゝことがしば／＼ある。それを紹介した人に訴へて出ても、彼は一向恥としない。大抵は「さうか」と言つたきりで、かへりみて他をいふ。

そこになると、ヨーロッパやアメリカの人の紹介狀は無暗に書かぬかも知れぬが、大變なき

き目のあるに驚かされる。滞在日數の短い旅先で、うっかり三本も四本も紹介狀をもらつて行つたら、諸方から引ッ張りだこになつて、諸方へ義理をかゝなければならぬはめに陥る。紹介狀はたゞ一本だけもらつて行けとは、よく洋行前に教へられた話だ。

○

私が初めてロンドンへ行つた時は、シベリア線で先づ露都に出た。こゝでロンドンの「デーリー・メール」の通信員をしてゐたマッケナといふ英人から、本社の外報部長のワトニー君にあてた紹介狀をもらつた。ロンドンに着いて後、早速「メール」社にワトニー君を訪ねたところ、あひにく旅行中であるなかつた。さうすると、右の紹介狀を見て、ワトニー君の代りに、主筆のマーロー君が逢つてくれた。マーロー君と話してゐるうちに、社長のノースクリフ卿に引き合せてやらうといふことになつた。兎に角一通信員の紹介狀がかくまでに尊重せられるかと、私が少からず驚いた。

○
 氣輕に紹介狀を書いて、それが役に立たうが立つまいが一向頓着しないところに、氣輕に人の身元保證を引きうけて、それが後日どうならうが頓着しない日本人の面目がある。

役に立つか立たぬかは別問題として、紹介もあんまり氣輕にすると、飛んでもない迷惑を蒙ることがある。よく「御名刺でもいたゞいて」などと、あつさり名刺を持つて行く人があるが、この名刺がそもく危い。私は前年某代議士宛の紹介の名刺を或る新聞社の人に與へて、忘れてしまったことがある。幾年か立つて右の代議士に逢つたら、君はひどい奴を紹介すると劍突をくはされた。聞けば右の新聞社の人は、私の與へた名刺を、その時は使はずにすんだので、そのまゝ貯へておいたものと見える。さうして幾年か過ぎて、彼がその新聞社をやめられて後衣食に困るやうになつてから、その古名刺を利用して、某代議士に面會を求めた。さうして彼はいきなり金を借りにかゝつたのだといふ。

一たび渡した以上は、紹介狀でも紹介の名刺でも時效にかゝるといふことがないから、何年さきになつて利用されても、苦情のいひやうがない。紹介狀の方は日附もあらうし、文句もあらうから、古くなつては使へなくなることもあるが、名刺に至つてはいつまでも使はれる。名刺を與ふることの危険はそこに在る。

右の事あつて以來、私は名刺を與ふる時、必ずこれに印をおすか、名を自署するかして、その上忘れないやうに、日附をちやんと入れておくことにしてある。

○
 時效にかゝることのない點をいへば、身元の保證がやはりそれである。身元保證書といふものは保證人が自らこれを取り消すまでは、何十年たつても有効である。

忘れてしまつた頃に尻を持つて來られても、證書が物をいふ以上は仕方がない。私は昔友人の長男が某銀行へはひるといふので、身元保證人になつてやつたことがある。これが又不

心得な男で、保證人になつてくれといふ時だけ顔を見せて、いよ／＼保證人となつてやつたら、それきり私の宅へ寄りついて来なかつた。かくて十年近くの歲月が過ぎた。そんな男の身元保證に立つてゐることも大抵忘れてしまつた頃になつて、突然右の銀行から「貴殿身元保證にかゝる何某の件につき相談いたしたき件有之につき」銀行まで来て呉れといふ、横柄な口調の書面が着いた。不承々々に出かけて見ると、彼は銀行の金を借りたまゝ逃亡したから、保證人においてその後始末をつけて呉れといふのであつた。

私は一も二もなく拒絶した。銀行の金を借りたまゝ返さないのなら、それは本人と銀行と相對づくの交渉であつて、保證人の知つたことでない。銀行で取れる見込のない金を貸したのは銀行の手落である。銀行が勝手に貸しておいて、取れなかつたからとて、保證人にかゝつて来る理窟はない。身元の保證はするが、借金の保證はしないと、ツツばねた。

これは私の言分の方が正しいので、銀行ではそのまゝ泣寝入になつてしまつたが、若し、

この時問題が借金でなくして銀行の金を使いこんだのでもあつたとしたら、私は當然身元保證人として、これに對して聯帶債務を負はなければならなかつたのである。馬鹿々々しいなどいふもなか／＼愚なりである。

○

なぜそんなに馬鹿々々しいかといふと――

第一、私とその男の保證をしたのは、その男が初めて銀行に入れてもらつた時なので、いはゞその小僧時代であつた。それ以來往來も何もしないで十年を過ぎ、だん／＼取り立てられて、その男が植民地の小さな支店に勤むるやうになつても、尙私は十年一日の如く保證人である。小僧の保證人にはなつたが、支店員の保證人ではないぞといふ譯に行かない。恐らく私の死ぬまで、執念深く保證人たるの責任が私につき纏つてくるに違ひない。本人がその十餘年間私の方へ出入もしないことや、私がそんな古い昔に保證に立つたのを忘れてしまつ

たことなどは、私の義務の解除条件にはならない。その男の使ひこんだ金は何萬といふ巨額に上つても、私は男らしく支拂はなければならぬのである。これが馬鹿々々しからずして何であらうか。

○ 「何萬といふ巨額に上つても」と今いつたが、馬鹿々々しいのはそこだ。借金の保證人なら金高が初からちやんと明記されてゐる。いくら利が利を生んでも、利には計算の基礎がある。心得の悪い人間が使ひこむ金額に至つては、いくらになるか何人にも分らない。いくらに上つたところが、それには計算の基礎といふものがない。本人の氣まぐれに使ひこんだだけの話である。氣まぐれといふものに計算の基礎などあらんやうはない。

殊に自分の保證したのは、くだいやうだが、彼が小僧の時だ。金まはりの極めて不自由な小僧の時だ。いくら使ひこんだところが高の知れたものである。それ故にこそ自分は保證に

立ち得たのだともいへる。ところが、この小僧がだん／＼用ひられて、植民地の支店などへやられて、大分金まはりの自由になつた時に使ひこんだ金も、やはり保證人が辨償しなければならぬとなると、全體この男をだん／＼用ひたのは銀行の勝手にしたことでないか、植民地の支店などで金まはりの自由な位置に進めたのは、銀行の目先の見えぬ計らひだつたのぢやないかといひたくなる。

小僧の時の保證がいつまでも無期限に繼續され、初は少額の保證ですむべかりし債務が無限にかさ張つて來ても、保證人は依然として昔のままの保證人で、これに追隨して行かなければならぬといふは、何といふ危険な事ぞ。同時に何といふ無法の事ぞ。

どんな契約にだつて大抵期限といふものがある。明に期限の約定がないとしても、契約書のどこかに解除條件といふやうなものが歌つてある。身元保證に限つて、保證人の生きてゐる限りいつまでも効力がつゞくといふは、あんまり人を馬鹿にしてゐる。それを頼む奴も奴

なら、頼まれて軽々しく承知する奴も奴だ。

○
更に寒心すべきことは、保證人の生きてゐる限り保證人の義務が続くばかりか、次第によつては、保證人が死んで相続人がその義務を繼承しなければならぬことさへある。現に私の知つた者の中に、親が保證人に立つてゐた義務を、親の死後引ツかぶらされて、ひどい目にあはされた人がある。それが間違つたことかどうかは知らぬが、兎に角ひどい目にあはされたことだけは事實です。

○
だから、いはないことぢやない。紹介状と身元保證とは、かろ／＼しく引きうけると、飛んでもない馬鹿を見る、馬鹿を客觀的に見てゐるだけですむなら、まだよい方である、

——昭和三年三月「文化生活」——

みやなの中のろくふ

ふくろの中のなやみ

夕立ゆふだちが降り出した。

「一しきり降つたら、晴れるだらう」と皆々がいふ。「急がすばぬれざらましを旅人の」といふ歌は、この邊から出た。

やがて雨は晴れた。雨やどりをしてゐた一同は、それ／＼に立ち別れた。たゞひとり取り残された自分は考へた。全體一しきりとは何事だらうか。

「しきり」といふ言葉に如何の意味があるのであらうか。「しきり」は「さかり」の轉といふなら、それでもよろし。ぱつとさかりが来て、ぱつとそれが消えてしまふこととも取られ

る。「しきり」は「仕切る」の義、一段落を意味するといふなら、それでもよい。一段落で何事か片づいて行くのだと思へば、さう思はれぬこともない。

だから、しきりといふ言葉の内には、自ら成住壞空の相がある、何事も先づだん／＼に出来かけて、出来上つたところで、又だん／＼壞れかけて、結局元の通りなくなつてしまふのを一應の順序とする。しきりといふはこの順序を總括した言葉である。この順序は人の力で如何ともし難い。強ひてこの順序を亂さうとするのは破滅の基であるとなつてゐる。果してそんなものだらうか。

たれの頭にも記憶の新しいものを例に求めて考へるなら、地震である。地震がしきりゆつた。ゆつた後又一しきりゆりかへしがあつたといふ。前のしきりには、地震の始まる前遠くから、びり／＼と軽く微震が来て、それがだん／＼強くなり、その最も強い極度に至つて後は、又次第に弱くなつて行く次第が讀める。これで地震の一段落がついた。後のゆりか

へしの一しきりは、地震後直ぐそれが起り、それが止んだかと思ふと、又幾時か経て起り、次第に時の隔たりが長くなつて、同時に地震の力もだん／＼弱くなつて行く。その幾度か起つてはやみ、起つては止むうちに、末終にあるかなきかに至るまでの連続のシリーズをしきりと見て居る。これでさかりの過ぎ行く意味が讀める。

語源の穿鑿はいづれでもよしとして、兎に角このしきりの言葉の中に、或る定つた若くは定り兼ねる時間の長さを含めて居ることは疑を容れぬ。こゝに或る時間の長さといふに、二種の説明が要る。一には瞬間に起つて瞬間に消える電光石火の如きものでないこと、二には或る長さはあるが、その長さは限も知らぬけに打ち續く長さでなくて、程なく止むには止むといふものであること。この二つが含まれる。

かういふしきりが、時の上にも、處の上にも、この世の中に充ち満ちてゐる。處でいへば、山一しきり、川一しきり、野原一しきり、田畠一しきりと續く。時でいへば、われらが

起き出づると、手水を使ふ一しきり、廁かまやに上る一しきり、飯を食ふ一しきりと續く。人生はリズムの集積といった心理學者のあつたのは、こんなことでもあらう。物は突如として起り、突如として消えない。人を訪ひて一しきり、人に訪はれて亦一しきりはかゝる。來客が一しきりの用談をすませて、いよく辭して歸らうとする時、ふと何かの拍子ひょうしで玄關口に立ち止れば、必ず或る一應の時間を話しこまなければ歸れなくなる。人が途中で友だちと會つて、ただ目禮したまゝで行き過ぐればそれまでだが、立ち止つて話しかけたら、必ず或る長さの物語がすまねば別れられない。これをヘフヂングだつたかゞ説明して、一つのリズムが切れた時、次のリズムに引ツかゝつたら、もう、そのリズムの絶えるまで、途中でやめる譯に行かなくなるのだと言つてゐる。

だから一しきりには長さがある。その長さが短い長さであつて、それがすめば、又次の一しきりに移るといふ。その限ある長さに依頼して、われらはしばしば自ら慰める。もしくは

あきらめをつける。もしくは時節の到るを待つ。一言にしていへば、われらはしばしば一しきりに安心を求めて居る。子供が泣き出せば、一しきり泣いたらやむだらうといふでないか。老人が咳せきき入れれば、一しきり咳いたら治なまるだらうといふではないか。山が峻せきしければ、今一しきりで峠とうげだといふではないか、川が淺くて舟が動かぬ時、一しきり行けば深味ふかみに出るといふではないか。苦も永くは苦しむを要せず、樂もいつまでか楽しんで居れるものでないとなる。悪い日であつたといふのは、日を一しきりと見、悪い年まはりといふのは、年で一しきりをつけたに過ぎぬ。その日又はその年の過ぎたらん後にぞ慰安を求めてゐるのである。この慰安は果してたしかなものかどうか。

かくの如くにして辛くも求め得た慰安は、未だ苦に即して樂を求むるの境地に達してゐないのではあるまいか。時節の到るを待つてあきらめる心は、臆病な未練がましい慰安ではあるまいか。人間が一しきりを口にする事は、われわれ不自由な境地にその身を陥おとしれて、満

足してゐることではあるまいか。

二

そもく、人生は一張の幕である。縫目もなければ切端も見えぬ一張の幕だ。そこに「すべて」があり、そこに「全」がある。この渾然として珠玉の如く一まとまりにまとまつた人生を、人間が自分勝手に兎や角と區切をつけて、何のかのといふのが癪にさはる。

雨がしきり降つてやむとする。やむのも亦一しきりでないか。いづれは又降り出さう。雨と晴とが互に入り亂れた一しきりがすめば、今度は雨も晴もかまはぬ大きな一しきりが来る。日でのつゞくこともあらうし、雨の降りつゞけることもあらう。その大きなしきりの上に、又大きなしきりがある。その上にまだ有る。いくらでもある。しきりの中にとり込む範圍を廣くすれば、限なくいくらでも廣くなる。この上廣くしやうも、おしつめて見やうも

ないといふところまでおしつめて行つて、初めてまとまりがつく。なま半可な途中で強ひて一區をしきつて、そこで一應のまとまりをつけようとするのが、現在の憂だ。

過去を戀しがる者は、よく何かにつけて、昔はよかつたといふ。われらに縁の近い新聞紙に就いて語る時にも、さういふのがある。昔はえらい新聞記者も出たが、今日はいないなどいふ。さうして必ず栗本鋤雲をあげ、末廣重恭をあげ、吉田熹六をあげ、矢野文雄をあげ、尾崎行雄をあげ、陸實をあげる。如何さま挙げられた人は皆えらい人に相違ない。しかし昔といふは永い間の時間であつて、今日とは短い間だ。日本に新聞紙始まつて以來もう六十年になる。この六十年間が皆「昔」であつて、今日といふは大正十四年に限る。六十年の間には幾多の悪い記者もつまらぬ記者も數へ盡されぬほど出て居る中に、飛び抜けてえらい五六人の名が人の記憶に残つてゐるまで、この六十年と一年とを比較にとつて、どちらにえらい者が多く出たかといへば、六十年の長い間に出た者の方が多しことは知れ切つてゐる。昔が

えらいのでない。昔の方が長いまでだ。勘違ひをして呉れては困る。

更に進んで考ふるに、昔の新聞記者がえらかつたといふは、右に擧げたやうな、政治家めいた記者が多かつたといふに過ぎない。ともすれば、昔の記者には國士が居たが、今は居ないなどといふので知れる。國士まことに結構である。しかし今日の新聞紙はもう國士の出る幕ではなくなつてゐる。そんな者が出ないのは當然である。さういふ事も少しは知つてゐてもらひたい。

新聞紙が政治を論議することを何よりの大事と心得てゐた時代には、どこの國でも、國士めいた政治家が新聞紙界に出てゐる。英米獨佛皆それだ。日本に限つたことでも何でもない。ところが、新聞紙の任務としては、政治を論議するのさることながら、事實を報道するの、もつと大事であるといふことがだん／＼分つて來てから、理窟ばかり言つてゐる變な國士などより、種取に走る記者と、手際よくこれを書き上げる記者の方が太切になつて來た。

歴史家はこの變遷を説いて、エヂトル時代からリポーター時代に移つたと言つてゐる。かういふ時代にえらい國士の出ないのは自然の成行である。その代り記事を書かせては、昔の國士以上の手腕をもつた記者が澤山に出てゐる。昔はよかつたなどと利いた風のことをいふべからず。

新聞紙を一つの「全きもの」と見たらば、昔がいゝか、今がいゝかは、この後の結末がどうなるか分らぬ限り、未決の問題である。政治の論議が、事實の報道に至る準備であつたかも知れない。事實の報道が、更に別に生じ來るべき或る物の準備に過ぎぬかも知れない。新聞紙は指導すべきものなりや、報道すべきものなりやといふは、際分古くから討議された問題であつて、政治論議時代を夢みて居る者は、ともすれば指導主義を取つて、當今のやうに讀者に媚び、俗衆におもねるのは新聞紙の天職を無視したものだと言ふ。事實の報道を何よりの任務と心得てゐる者は、指導などは以ての外のお世話で、新聞紙はたゞ有る事を有り

と報じ、無い事は無いと知らせさへすればよいと言つてゐる。前者は後者を新聞紙の墮落と罵れば、後者は前者を頭が古いと笑ふ。今日この馬鹿々々しい議論を聞はしてゐる閑人が時々新聞や雑誌に出て来る。いづくんぞ知らん、かういふ馬鹿々々しい議論をしてゐる間に、いつしか、新聞紙の任務は指導ばかりでない、報道ばかりでもない、要は「奉仕」するに在るとて、奉仕主義なるものが、ちやんと出て來てゐる。

政治論議の時代から事實報道の時代を見たならば、政治家臭い記者が立派に見えて、種取じみた記者がつまらぬ者にも見えよう。指導を重視する眼から、報道を重んずる側を見たならば、事實は議論よりも力のないものとも見えよう。新聞紙の「全」を見ずして、或る時代或る方面をしきつて、甲から乙を評すればどんな事だつて言へないことはない。言ひ得て得意になつてゐる間に、兩者の中道を貫いた新時代、新方面が開かれてゐることを知らぬなどは愚かしき至である。新聞記者を評するなら、新聞紙の「全」を見て申せ。しきり／＼で見

ようとするから間違が起る。

これを譬ふれば、新聞紙に連載さるゝ小説の一二回分を飛び／＼に讀んで、それが面白いとか面白くないとか言はれようか。評をするなら、全篇の結構を見てからのことだ。人を評するものが、その人の或る一日の行動だけ見て、悪人とか善人とかいひ得ようか。棺を覆うて後初めて語るべきである。無暗に昔を戀しがつて今をけなすが如きは、今の一部を悪い方にしきり、昔の一部を善い方にしきつて見た亂視の一種である。見當ちがひも元よりその所と笑つてやりたい。

三

しきりは時間の上のみならず空間の上にもある。前のがしきりなら後のはくぎりか、一段落をしきつて考ふることに、臆病者の安心があり得ると同じく、一地區をくぎつて考ふるこ

とに、無精者の便利がある。凡そ物をまとめるに、その一部々々を区切つてまとめるほど樂なことはない。樂は樂だが、ともすればそこに間違が起り、面倒が起り、争が起る。部分の眼は大局の眼をくりますが爲だ。

京橋區の警察署と麴町區の警察署と、その所管の區域がちやんと定められて、分秒の交渉を許さない。お蔭で兩署の間の山下橋や數寄屋橋の上には、乞食が始終治外法權顔をしてすましてゐる。甚しいのになると、自分の管内に出來た行き倒れ人を、ソツと隣の管内へおしやつて、すましてゐる警官も昔はあつたさうだ。今はあるまい。何で今少し大きな目をして東京市といふものを見ることが出來ないのだらうか。

世界といひ得ぬまでも、せめて日本を一目に見得るなら、少くとも日本の中は一視同等と行ける。それを細かに割つて、北海道は九州と争ひ、中國は東北と争ふのが、今日の日本の状態でなからうか。議員の選舉區にしても、日本全國を一區に見て、些細な行政區劃に囚は

れずして議員を選ぶことゝしたら、それこそ一地方の利害を超越した一國の代議士が得られよう。それでは、人によつて投票の得點數に、餘りに大小の開きが出來過ぎようと心配するなら、投票得點の數に應じて、議場に於ける票決權の率を定めるがよい。心ずしも一人一票たるを要しない。さうすれば、選舉民も出來るだけ多數の票決權をもつた、有力なる議員を上げようといふ考から、散漫な投票を避けることもあらう。これでは少數の有力な議員だけが議場で幅を利かせて、結局は寡頭政治に陥るだらうなどと心配することなかれ。若し衆望を負うた寡頭政治が成り立つなら、それも或は今の行き詰つた衆愚政治に勝るものかも知れぬ。それを何ぞや、一たび大選舉區が行はれた間もなく、議員だか政黨だかの個々の利害から打算して、又もや小選舉區に引きなほし、今度普通選舉法で再び大選舉區にかへると思ひきや、中選舉區とやらに一時ごまかさうとしてゐるなどは、何處まで未練たらしいことかと齒がゆくなる。

名は大國だが、國土こくどの小さい日本だ。この小さい日本をいやが上に小さくきつて、それで日本人が小さくならなければ正ただに奇蹟である。市内電車が全線均一の賃金は、長い間ごたついでやつと成り立つた。ローランド・ヒルのベニー、ボーストの理窟からいへば、均一が至當だ。汽車の賃金さへ、長短遠近を問はず均一にして差支ない位に吾々は思つてゐる。そこへ乗合自動車が出来て、むざ／＼とこの均一制を破つた。破つたにしても、市營の上野から東京驛まで一區十錢、會社線の新宿から日本橋まで一區十五錢であつた頃は、まだのんびりとした味があつた。市營が従前の一區を二區に割くと聞いて、會社線までがこま／＼と一區を二區に分けた結果、淺ましい人の心はひたもの十錢がところを五錢でまさうとあせるの餘り、如何に市民の心が小さかしくなり、せま／＼こましくなり、けち臭くなつたかは想像に餘りある。區制を小さくした爲に小さきみに乗り降りする者が多くなつて、自然全線の速力が鈍くなつたのは、姑とほくいふまい。その爲に三枚ですんだ切符が六枚になつて、乗客にも車掌に

も手数をかくること一倍に及んだことも、姑とほくいふまい。それらは姑とほくいふまいにしても、もともと小さい島國に生れて育つて、さなきだに島人根性の、こま／＼と小さい事にのみ憂身をやつす日本人の心を、いやが上に小さくしようとする傾向に至つては、斷じて看過すべからず。一自治體、一營利會社の單なる經濟上の問題でない。一國民心の向ふところを支配する重大なる社會問題と、私は見てゐる。

四

話は馬鹿に横道に入つてしまつたが、元來が非哲學的に出來た私の哲學には、正直なところ横道も本筋も差別はない。横道もつきぬけてしまへば又本筋へ出る位に考へてゐる。今少し横道を行かう。

満山の雪——遙にざは／＼と人聲ひとこゑが聞える。

この人聲が遠まきに一帶の澤地を圍んで、だん／＼上方へ押し寄せて来る。迫子だ。

山の上には網を張つて獵師が待つてゐる。

下から迫子に追ひ立てられて、兎が一つ雪の中へ飛び出した。右も左も迫子のけた／＼ましい聲。血路は山の方に一つ開けてあるきりだ。

この一つの血路にいやでも兎は進まなければならぬ。そこを行けば、網にかゝるか、鐵砲に打たるゝか、二つに一つは免れぬ。

兎は雪の上に血みどりになつて仆れた。

これが日本の教育である。

義務教育といつて、子供が年頃になれば、何が何でも小學校に入らなければならぬ。小學校六年の課程を経來る間に、いつとはなく、小學をすませば、更に中等の學校に入るべきものだといふ思想が養はれる。實際又今の小學教育だけでは、一公民として世に立つだけの用

意は出來ない。そこでよく／＼資力の乏しいものでない限は、中等の學校に行くべきものと定めてしまふ。果然こゝまで迫子に追ひ上げられた。

中等の學校にも色々あるが、特殊の事情に餘儀なくされた者の外は、たれしも農學校や商業學校や師範學校に行くよりは中學校に入りたがる。中學校とはその名の如く、中途半端の學校で、日本中のあらゆる學校中、最も無用の教育を施すところの學校である。小學校より大學に至る間の中途の豫備學校としてのみ、多少の用には立つが、中學校だけでは卒業したとて、卒業したといふ一種の銀粉（敢て金粉といはず）を引ツかけてもらふに止まり、世に出ては全くの時間つぶしになつてしまふだけだ。中學校の科目は數々あるが、大別すれば、語學と數學と多少の科學で、そのうち語學に就いていへば、漢文も半端、國文も半端、英語に至つて半端の半端だ。小むづかしい文法語格は、肝腎の英語國と同じほどにやかましく教へるが、さて實用となると、話も出來なければ手紙一本ろく／＼には書けない。中學校卒業生に

して外人に道を尋ねられてすら／＼と答へ得るものが幾人あらう。外人の店に入つて、滞りなく買物の出来る者が幾人あらう。いはんや、外人から手紙で何かを頼まれて、その断り状を書き得る者としては、ほとんどない。断り状が書けないから、大抵の事は承知してしまふ。大抵の事は頼まれた通りに承知するから、日本の學生は柔順でいゝなどとほめられる。怪我の功名これより大なるはあるまい。

又しても話は横道に外れた。數學はといへば、代數も幾何も三角も皆半端で、大抵の秀才も卒業の後一二年の間に皆忘れてしまふ。たゞ高等の學校に進む者のみに取つていさゝか用には立つが、高等學校に進む者が、必ずしも科學者になるとは限らぬから、文學や法律に志すものにとつては、興味もひかねば利益も得られない。由來日本では普通學の意義をはき違へて、普通人の一應知つておくべきものでも何でもないものを、たゞ小學校や中學校の科目にあるから知らなければならぬものと心得てゐる。普通學だから小中學に置かれるのでなく

して、小中學に置かれてあるから普通學と思はれてゐるのである。普ねく通ぜざる普通學、われ初めてこれを日本の中學校において見た。

高等學校に行く者の外、用のない中學校だから中學校を卒業した者は、高等學校か専門學校に行きたがる。行きたがるより何より、高等又は専門學校には中學校卒業生、又はこれと同等以上の學力を有する者でなければ、入學出来ないことになつてゐるのであるから、高等學校には、中學校といふ一筋道しか通つてゐない。此處まで迫子が追ひ上げることになつてゐる。

大學といふ名稱に隨喜湯仰の涙を流してゐる今の若い者には、大學でなければをさまらな。この大學に入るには、私立大學は別として、帝國大學には、科によつて、又もや入學試験が要る。追ひまくつておいて網にかけるの類だ。網を免れて、ヤツと大學に入つて、ヤツと卒業すれば、もういゝ加減な年配になつてゐる。短命な日本人には、大學が鐵砲の玉だ。

しきれるだけ仕切つて何者をも一方口へ追ひつめようとするのが、どの方面にも見らるゝ傾向であつて、劃一制度といふものが無上に幅を利かす。昔、日本では如何なる人も、内務省の醫術開業試験を二回受けさへすれば、醫者になれた。今日では開業試験が廢止されて、一定の専門學校を出た者でなければ、醫者にはなれない。いくら醫者の方が出來ても、一定の専門學校に入るには、一定の普通學が出來なくてはいけないといふのである。その普通學といふのが、例の普通ならざる中學校の普通學だ。辯護士になるのも、今までは試験を受けさへすればよかつた。ところがこれも一定の専門學校へ追ひつめにかゝつた。不幸にして辯護士にもならうといふ元氣のいゝ連中は、この試験制度の廢止に苦情を唱へて、試験延期の大運動を試みた爲、時の政府はとう／＼その請を容れて延期と決した。しかしこれも幾年かの後には醫者同様一方口に追ひつめられるのである。

醫師然り、辯護士然り、官吏に至つてはいふまでもない、こと／＼く出入の口が定つてあ

る。按摩や針醫でも口が定つてゐて、みだりに入れない。そのうち新聞記者も一定の試験の上か、一定の學校出の者から取ることもならうか。恐らくその頃には女中登庸試験、植木屋資格試験、大工檢定試験などいふものも出來よう。楽しんで待つてゐるか。

三月一日から無線放送が始まらうといふ時、何萬といふファンが勝手に作つてゐた受信機が許さるゝとか許されぬとか、大分問題になつた。政府の認可した一定の型にまとめてしまひたかつたらしい。一定の型にまとめずして、ファンがめい／＼勝手に作つて、勝手に放送を受けることゝなつたら、だれも受信料を拂ふ者がなくなつて、放送局の經費を辨せんやうもない。アメリカのやうに新聞社が各處でニュースの放送を行へば、新聞社の方は無料でやつて、受信者にも金はかゝらぬが、放送の中心が一個處に定つてゐないと、電話の取締がつかぬといふので、新聞社や何か々相寄つて放送局なるものを作つた。作つて見ると、新聞社任せの場合とは違つて、金がかゝるから、何とかこの金の埋め合せをうけなければならぬ。

こゝでやかましい規則を作つて、聞^{△△△△△}えても聞くなといふことになつた。聞くまいとすれども今日の無電かなで、空中から自然に聞えて来るものを、聞くなといふは無理だ。機械にしても、各人が完全に所有権をもつてゐるものを、いくら何^{なん}でもまさか没収する譯に行かぬから、機械は持つてゐてもいいが、それで聞いては法律に觸れることゝなつた。そんなことが取締のつくものでない。とう／＼通信省も我を折つて、認可さへ得れば、どんな器械を使つてもかまはぬ事になつて結末がついた。この大天地に何處^{どこ}とも定めず存在してゐる無電放送にまで、一定のしきりをつけて、或る者には聞かせ、或る者には聞かせまいとしたのである。空中に満ちた空気を人間が吸ふのは已むを得ぬが、酸素だけ吸つて、窒素は肥料に残せといふの類だ。今少しすておいたら、米國から傳はる無電を聞くには、一々輸入關稅を拂へといふことになつたかも知れない。

何でもかんでも、物をいくつにか割つて、その間に區切^{あひだ}を入れなければ、承知出來ぬと見

える。

五

人生を時間にしきり、空間に區切つて、その一片から人生を見渡した積りであるのも間違なら、これで他の一片を見ずして、われとわが心を強ひて安心しようとするのも大きな間違である。何事も成るがまゝに任せて、そうつとして置かうでないか。人の力でしきつてしきり切れるものでもなし、くぎつてくぎりおほせるものでもない。民を治むるの道もこゝに在る。安心立命の道もこゝに在る。

人生を幾つかに切り割つて便とする者は、西瓜を切つて喰ふの便を知つて、丸ごとの丸いのが畠の青葉の間どころがつてゐる時の美を知らぬ者だ。

全きをこそ、すべてをこそとこひ願へ。われは切實をいやしむ。請ふ「まるごとの歌」と

いふのを歌つて、この篇を結ばう。

人の世の如何ならん事にも

一として意味なきはなし。

たとひそれが如何に哀しいことであつても、

又如何にそれが筋の通らぬ事と見えても、

必ずそれづくに何等かの意義がある。

よし、それが智慧^{ちま}限りある人間に分らずとも、

神のみのしろしめす

さるべき意義のないはない。

天の命、

神の攝理、

佛の導き、

趙州の無字、

庭前の柏樹子、

名は何とも名のれ、わが求むるは名に非ず

人の世は一卷の繪巻物に似たり。

開き行くまゝに見れば、

見にくき、美しき、とりづくならざらん。

一卷をことづく開いて初めて一目に

西 洋 風 画 展

その他

ババさんママさん

イギリスのゼノア

ふくろの中のもの

いみじき繪卷の姿ぞ見得べき。

苦しみと哀しみを訴ふること勿れ。

その中にひそめる意義と妙味とを

探り得ぬわが力の乏しきをかこて。

—大正十四年四月「改造」—

西洋よばはり

一
アメリカ合衆國といふ國はあるが、北米合衆國といふ國はどこにもない。ベルジウム人の王さまといふのはあるが、ベルジウム國王といふは、少くとも今のところ無い。それと話はかはるが、ヨーロッパ、アメリカといふ國はあるが、西洋といふ國はない。

世間では、西洋々々とだらしなく西洋よばはりをするが、全體西洋とは何だ、アジアを東洋といふに對して、ヨーロッパ、アメリカを日本では西洋といふ。日本の東にありながら、アメリカまでを西洋とは、これ如何にと問ひたくなる。

二言目には、西洋ではかうのと言ふのを聞く毎に、片腹痛くなる。そんな

な國が何處にあつて、何處にそんな纏まつた西洋風、西洋流なるものがあるか。説明の出来る人があるなら、伺ひたい。

「西洋人」といふのが、そも／＼またしやくにさはる。さうしてこの正體の定かならぬものに對して、特別の尊敬を拂つてゐるらしく見えるのが、尙以てしやくにさはる。

一つかみに西洋人とはいふが、その中には、イギリス人も、フランス人も、ドイツ人もある。ラテン民族もあれば、チュートンの民もある。さうかと思ふと、オーストリアにはマジヤール族、ロシアにはキルギース、タタールなどいふアジア系統の人種もある。西洋人といつて、目をみはつて驚くにもあたらなければ、また自ら高うして、これをさげすむにも及ばない。「西洋人」といふ總稱の下に、善悪優劣のさまざまに異つた人間を一まとめにして、これをさながら日本人よりはるかに優等の人種であるかのやうに思ひあやまつた爲に、日本人の今日までに被つた損失がどれ位あるか測り知れない。

前年私は人をつれてアメリカからヨーロッパへ出かけたことがある。アメリカでは、人間も建物も道路も大きいので、如何にも西洋人といふは日本人よりえらい者のやうに思はれて、いくらか恐れをなしてゐたが、それがヨーロッパに渡つて、イギリスに行き、フランスに行き、スイスに行き、イタリアに行くに及んで、人間はだん／＼小さくなる、建物は低くなる、道幅は狭くなる。とう／＼私のつれて行つた男は「西洋にもこんな所がありますか」といつて、次第にその國を馬鹿にするやうになつて來た。スイスやイタリアを馬鹿にするのは間違であるかも知れぬが、同じ西洋の中で、馬鹿にしても一向差つかへのなささうに感じられる國や人がないでもない。

相手が強いと見れば、表面には恐れ敬ひながら腹の中では、敵意といはないまでも、一種の反感を藏し、相手が自分より少しでも劣つた人と見ると、急にえらくなつてゐるばかりちらすのが日本人の癖だ。アメリカにゐる日本人などが、兎角主人や雇主の前ではおづ／＼と恐れ

かしこみながら、蔭へまはれば、聞苦しい雑言を用ひて、口ぎたなくいひけなすのもその一例なら、支那人や朝鮮人を見ると、西洋人の前で押へに押へた鬱憤でも晴らす氣になつて、打つてかはつて尊大な態度を取るの他の一例である。

西洋などと、一まとめにすべからざるものを一まとめにして恐れるのは、東洋人と見るとことごとく劣等人種であるかの如く振る舞ふのと、そのあやまりは等しい。

二

うまくもない西洋料理といふものを、無暗に珍重して、一にも洋食、二にも洋食と、洋食がするのは、やはりこの事大思想の發露である。

全體西洋料理といふのは何だらうか。西洋といふ一まとめの國がない以上、西洋料理と一まとめにすべき料理のあらんやうはない。肉類を平べつたい皿に盛つて、ナイフとフォークと

添へて出しさへすれば、西洋料理で通つてゐるが、若しうなぎの蒲焼に米の飯をあしらつてこれを例の平べつたい皿に盛つて、ナイフとフォークを添へて出されたら、これを何とかいはんや。現に前年故高峰博士が米國から歸つて、お客をした時、こんなのが出た。

フランスの青蛙やかたつむり、イタリーのマカロニ、イギリスのブローター、アメリカのソフトシールド・クラブなど材料のそれごとくに異ふのは、いふに及ばず、料理の仕方にも料理の出し方にもそれごとくに異つたところがあつて、フランス料理、イタリー料理と、個々の國の料理はあるが、一括して西洋料理といふが如き料理はありはしない。ヨーロッパ人を見ない人は、どの國の人を見ても、同じ顔に見えるやうに、日本料理、支那料理でない限り、あとはみな西洋料理と心得たのでは、ちと頭がよすぎる。

昔、明治の初年に、政府から幾人かの留學生を外國に派遣したことがある。何分初めての旅とて、案内が無くてはいくまいといふので、永くイギリスに駐在してゐた某省の古い役人

がその一行につけ添へられた。太平洋の航海無事に終つて、サンフランシスコに着いた時、或る朝留學生ばかりがまづ起きて食堂に席をとつたが、案内役のお役人はいつまでたつても出て来ない。ともかくも一同でまづ水菓子から取つて食べ始めた。そこへ後ればせに下りて来た案内役の先生がこの體を見て、まツかになつて憤り、「全體食事の初に果物を食べるといふ法があるものでない。だから私の来るまでお待ちなさいと、始終申上げておいたぢやありませんか。こんなことをしては、飛んでもない恥ツかきだ。」とぶん／＼當りちらした。留學生一同は一ち／＼みにち／＼み上つた。といふ話がある。

いづくんぞ知らん。アメリカでは朝飯の時に一番に食べるのは水菓子であつて、イギリス風に魚や肉を最初に食べるのばかりを西洋料理の作法と心得てゐたこのイギリス通は、それを知らなかつたのである。

朝飯といへば、イギリスでもアメリカでも、肉類や果物を幾皿も取りかへてたべるが、フ

ランスやドイツやロシアでは、パンとコーヒーかお茶きりである。日本でそれをまねて、朝飯の代りにお茶とパンですませて一かど西洋ぶつて居る人があるが、それはヨーロッパ大陸の西洋であつて、イギリスやアメリカの西洋ではない。そんなことなら、いつそ、みそ汁と香の物で、日本の西洋とすまして置くがい。

日本では、たれがいひだしたか、西洋料理を食べる時、ナイフやフォークを皿にたてかけて置かぬと、まだ食べてしまはぬものまで、ボーイが持つて行つてしまふといふ。それが恐ろしさに、誰しも皿の兩脇へナイフとフォークを一本づつかけて、さながら兩手でおさへつけたやうな恰好をさせて、これでも持つて行けるなら持つて行つて見ろといふやうな意氣込を示して居る。全體こんな馬鹿々々しい嚴重な「警備」をほどこして、喧嘩腰で飯を喰ふ國がどこにある。イギリスでは、ちやんと皿の上へ八文字に置く。私がイギリスにゐた時、皿のふちへ掛けて置くのは何處の國の作法だらうと聞いてみたら、それはアメリカの不作法だらう

といつて笑つた人がある。ところがアメリカに行つて見ると、氣の利いた人は誰もそんな眞似をしてゐない。それはドイツかロシアの百姓だらうといふことであつた。ドイツやロシアの百姓なら、ナイフに肉を載せて口へ持つて行くやうな事を平氣でする位だから、或は日本のやうな皿の押へ方をしないには限るまい。さうして見ると、日本の西洋料理の食べ方は、氣の毒ながら、ドイツやロシアの百姓の西洋流といふ事に相成る。

三

どこの國の服装とも、えたいの知れない筒袖の着物に、もゝひきのやうなものを穿いて、それが洋服で候ふが笑はかすが、こんな物を着さへすれば、日本人が日本服を着ては行けぬところへも行かれ、上れないところへも上れるといふのだから、驚く。日本服なら威儀堂々たる袴羽織を着けても出入を許されぬところも、洋服なら薄ぎたない背廣に折目のなくな

つたズボンをはいてゐても許される。日本服でうツかり兩腕や兩肩を露はし、帯もしめずに大道を歩いたら、巡査から小ツびどく小言をくふことは知れ切つてゐるが、西洋風の海水着を着て、海水浴場を横行したり、西洋流の運動シャツを着てマラソン競走の練習が何かに、肩もあらはに銀座のまん中を走りまはるのは、何のおとがめも受けない。甚しいのは日本の木綿のまはしでは海水浴の許されぬ場處で、西洋風のパンツならばいゝことになつて居る。水にはひる時まはしをしめるのは、溺れかけた時に後の三つを持つて救ひ上げるに便利がいゝといふので、昔の水泳場では決してさるまたなど許されなかつた。今はすなはち然らず。まはしは日本のものであつて、さるまたは西洋流らしいが故だ。そのくせ、ヨーロッパでもアメリカでも、さるまたは女でなければ穿かない。

喧嘩をしたり、労働をしたりする者には、邪魔くさい袖や裾がなくて、いろんな物の自由にはひる衣囊の多い着物は便利に相違ない。その意味からいつて、いはゆる洋服を兵隊や職

人や下級官吏なんぞが着るのは宜い。日本でも昔から、労働者が筒袖にも、ひきをはいて、大きなどんぶりを仕かけた腹掛けを着けたのは同じ趣旨だ。喧嘩や労働に禮服を着る必要はあるまいから、何を着たとて、便利でありさへすれば、それでいゝ。白靴の下へ黒い靴下をはいても、笑ふには足らぬ。三日も四日も洗濯しない白ズボンの折目のなくなつたのを穿いても、笑ふには足らぬ。つめ襟の白麻の上着を、下着もつけずに、ぢかに着て、いくら暑くても上着はぬけないといふのでも、格別笑ふには足らぬ。思ひつき次第に何でも勝手に着るがよろし。

しかし人間の仕事は喧嘩と労働とばかりでない以上、たゞ便利だけで宜いといふわけには行かない。大勢の人の目に觸れるのである以上は、ちつとは見る人の心もちを快くするか、さなくとも心もちを悪くさせないだけの外觀も考へなければなるまい。どういふ身分の人間に立ち交らぬとも限らない以上は、服装にも多少の禮儀作法がなくては叶ふまい。近頃九

州邊の汽車の中では、バジマを着て食堂に出入する乗客をよく見かける。食堂の中で、たれもゐないのを見かけて、ソツと煙草を吸ひかけても必ず小言をいひに来る車掌もボーイも、バジマ姿の食堂出入には、何もいはない。いきな着物を着て来る位に思つてゐるらしい。フロックコートを着て、白の蝶形のネクタイをしめて、中折帽をかぶつて、縞のシャツを下に着て、赤皮の靴をはいて、一かどの禮装のつもりでゐるのを怪しむに足らんや。

四

それでも男の方はまだ我慢もなる。女のいはゆる「洋服」に至つては堪ふべからず。近頃女の洋服とやらんいふものが馬鹿にはやるが、全體あれは何處の國の何の服だ。それを又何のつもりで着てゐるのだらう。男の服なら便利といふこともある。女の服には、男の服の便利といはるゝ所以の、衣囊がなくて、裾がある。見たところが美しいかといふと、「く」の字

なりに曲つた兩脚を出して、猫背にかゝんで、内輪に歩いて、何の美しさぞや。経済的かといふと、着物ばかり外國の眞似をして、日本の家に住み、日本の飯を食ひ、日本の風呂に入り、日本の寢床に寝て、出入一々、日本服に着かへてゐて、何もかも二重になつて、何が経済的であらうか。

強ひていへば、夏向は腕も襟も脚もさらけ出して歩けるだけに、さぞ涼しくてよかる。いひかへれば、日本服の帯をしめたり、襟を正したり、きちんとしたところがないのが宜い。

今一ついひかへれば、だらしがなくていゝから宜いといふことになる。洋服々々とえらさうにいふが、洋服らしい洋服を洋服らしく着こなしてゐるものが幾人あらうか。ロシアのムチークの女房の着るやうなものもあれば、アメリカのフラッパーしか着ないやうなものもある。甚しきは寢衣か海水着のやうなものを着けて得意になつてゐる者もある。男はパジャマで汽車の食堂を出入するだけだが、女は寢まき同様の姿で、帝國ホテルのグリル

を出入いたし居る。見ツともないから止せともいはれず。

これも流行とならば已むを得ぬ。今に目が覺めてよくあんなものが着て歩かれたと思ふ日が、速からぬ内に來よう。

五

輕井澤の高原のまんなかで、ニューヨークのウール・ストリートに住宅でも建てるやうな氣になつて、せゝこましい窮屈な變て、けれんな恰好の家を建て、文化住宅とすまして居らるる世の中だ。あんな家で子供を育てたら、さぞかし、おツとりした、小ましくくれない人間が出來よう。

洋食も食へ、洋服も着よ、洋館とやらにも住め、たゞ知りもしないで、西洋々々いふな。

——大正十五年十月「女性」——

バ、さんマ、さん

○
子供に「バ、さん」だの「マ、さん」だのと呼ばせて得意になつてゐる親がある。その氣が知れない。

何でそんな變ちきりんな言葉を使はせるのだらうか。日本服よりも洋服を着る方は、立居振舞に便利などいふ理窟もつく。日本食よりも、わざ／＼洋食を取るといふのは、その方が旨いのだといへば、それでも言譯は立つ。たゞ日本語で「とうさん」「かアさん」と言つて何の不都合もなさうなところへ、わざ／＼「バ、さん」だの「マ、さん」だのと言はせるに至つては、一圓合點が行かない。

幼い時から英語に慣れさせるつもりなら、「バ、」と「マ、」で澤山であつて「さん」が餘計だ。「さん」がついては英語にならない。假に英語になるとしても、親を呼ぶ時だけ「ババ」だの「マ、」だの言つて、その他はすべて日本語を使つてゐるなら、どこに英語に慣らせるといふ申譯が立つ。

子供にバ、さんのマ、さんのと言はせる親に限つて、英語の一つも知らないのが多い。知つて居れば、あんな馬鹿々々しい言葉は使はせないはずである。對話の中に無暗に英語を交へたがるのは、大抵あんまり英語を知らぬ人に極つてゐる。

○
英語といふわけでない、英獨佛こと／＼く父の音はバ行で母の音はマ行だ。支那でも父は爸で母は媽である。この世界共通の音を用ふるのが何で悪いと喰つてかゝる者もある。

利いた風のことを言ふべからず、世界共通の音を用ひて、子供が世界中のあらゆる國の人に、父よ母よと呼びかけるやうな場合をどうして想像し得よう。世界中のどの國にも父母をもつた、世界的の子供といふ者が、不幸にして生物學的に出來ツこはない。

けにも世界中の多くの國は父母を呼ぶに、バ行とマ行を以てすること論者のいふが如くである。日本のやうにカ行とタ行を以てするのは極めて珍しい。珍しいだけに、文字通り日本の珍とするに足る。まさか外國の幼兒はそろひもそろつた無性者ばかりで、口を開くのが面倒くさくに、つい兩方とも唇音で間に合せ、日本の幼兒は天性いづれも器用に生れて、生れおちるから早くも、舌音と喉音との使ひわけに成功してゐるといふわけでもあるまいが、兎に角タ行とカ行は、バ行やマ行よりも、發音の手續に於いて一段の進境を示してゐる。以て日本の珍とするに足るといふのは、ちと牽強附會だらうか。

上つ方では父を「おもうさま」といひ、母を「おたアさま」といふ。下つ方では父を「ちや

ん」といひ、イギリスでは父を「ダヂー」といふ。日本の「とうさん」に顯はれた「タ」行の音が、かういふ處に縁をつないでゐることも、興味ある事實である。この興味ある事實は「とうさん」「かアさん」と傳つてゐる時にのみ分る。

○

世の中には、外國語を用ひなければ、どうしても意味を通じさせ得ない事が澤山ある。かかる場合に、英語なり佛語なりを、そのまゝ用ふるのは已むを得ない。例へば英語の *gentleman* がどうしてもフランスの譯語では間に合はぬとて、現に *gentilhomme* といふ語根の全然同じい言葉があるにも拘はらず、フランスの學士院は *gentleman* の語をそのまゝ佛語に採用してゐる。又例へば、西洋にはない日本の「モグサ」を英語でそのまゝ採用して *moxa* と書き、灸點をすゑることを、これに *bustion* を加へて、*moxibustion* といつてゐる。この外私の

貧弱な外國語の知識を以てしても、どうしても外國語でなければならぬ場合がいくらもある。さういふ時已むを得ず、外國語を使ふのに遠慮はいらない。しかし「バ、さん」「マ、さん」は決してそんな種類の言葉でない。それともこんな言葉を子供に使はせたら、亭主も女房もえらさうに見えるともいふのだらうか。

○

私の知つた或るお茶屋の主婦に二人の子があつて、彼はこの二人の子に「マ、さん」と呼ばせてゐる。「お前は英語も知らないくせに、何でそんな英語の出来損ひみたいな言葉を子供に使はせてえらがつてるのだ。」と私が詰つた時、女は意外の辯明をした。

「お前と言つては、ちとぞんざい過ぎるし、あなたと言つては丁寧すぎると思ふ時、あなた方はよく君といふ言葉をお使ひになるぢやありませんか。それが一番あたらすさはらずで

いいのです。「マ、さん」といはせるのもやッぱりそれよ。私どものやうな浮いた商賣をしてゐる者がかアさんと呼ばれると、何だか世帯じみて、急につめたくなつてしまひます。女中たちが、おかみさんくと言つてる傍から、子供から「かアさんく」とやられては、たまりません。その上私をかアさんといへば、いづれ彼の人をと、うさんと言ふことになるでせう。それが何よりいやなんです。」

斷つておくが、この主婦は男と喧嘩して別れて子供だけを引き取つてゐるのである。なるほどかういふ特殊の地位にある者には、「マ、さん」は當らずさはらずでよからう。

バ、さんマ、さんは、男と喧嘩して別れて子供だけ引き取つて育てゝゐるお茶屋の主婦にだけ使はせておけ。

イギリスのゼノア

◇
大分前のことだが、うっかり「イギリスのゼノア」と言つて笑はれた人があつた。何でもその時その人の演説を親しく聞いてゐたといふ人の直話に依れば、そんなことは決して言はなかつたといふことだ。恐らくそんなことは言はなかつたのだが、何かの拍子に誤り傳へられたのであらう。それはしばらくさうとして置かうが、假にその人が實際「イギリスのゼノア」と言つたにしようが、これを笑ふまでには多少の手續がある。

◇
「イタリーのゼノア」と言ふつもりでゐたのを、つい誤つて「イギリスのゼノア」と口を

すべらしたのなら、それはそれまでの話で、笑ふには當らない。若し又ゼノアがイタリーにあるのを知らずして、固くイギリスにあるものと信じてさう言つたのなら、如何さまその無學は笑つてやつてもいゝやうな氣もするが、しかし正直にその信する所を言つてのけた點はむしろ買つてやりたい。口さきで嘘ばかりついてゐる人間の多い世の中に、かういふ正直な人の出たのは、なか／＼以て笑ひごとでない。

◇
假に更に一步を進めて、彼がイギリスに在るゼノアといふ意味で「イギリスのゼノア」と言つたに見ても、「イギリスにゼノアなんていふ所はありやしない」と、さうあツさり片づけ得るだらうか。

◇
イギリスも廣い。その國のどこかの片隅に、存外ゼノアといふ誰も知らない町があるかも

知れない。それを彼一人が知つてゐたのかも知れない。ゼノアの語根の「ジエネ」は創生記のジエネシスを始とし、随分使ひならされた、何處にでも出て來さうな言葉だ。同じ語根から出たスキスのジエネバをゼノアと間違へる人は、ざらに在る。

だから「イギリスのゼノア」と言つたのを笑ふつもりなら、それはイギリスの本國にも、その廣大無邊の領土の中にも、ゼノアといふ町も村も字も小字も、絶對的に決してこれなしといふ證明が立派に出來てからの話だ。その手續がすまない内に無暗に笑つては、笑ふ者の無學がむしろ笑の種とならぬとも限らぬ。

或る處で「ニューヨークの日刊寫眞新聞デーリー・ミロア」と言つたら、ぶツと吹き出した人がある。なるほ「デーリー・ミロア」はノースクリフ卿が創刊した有名なロンドンの寫眞

新聞の名に相違ない。しかしこれと同じ名の日刊寫眞新聞が去年からちやんとニューヨークに出來てゐる。ぶツと吹き出すなどは以ての外だ。

◆
 キンストン・チャーチルといへば、誰しも直ぐイギリスの有名な政治家で記者を兼ねた人の名と合點してしまふだらうが、生憎キンストン・チャーチルとはアメリカの政治家で記者を兼ねた人の名であつて、イギリスの政治家の方はキンストン・スペンサー・チャーチルと中間名が一つ餘計にはひつてゐる。

◆
 朝日新聞に出てゐる連載漫畫「プリンギング・アップ・ファーザー」(おやぢのしつけ)の筆者マクマナスの書いた漫畫に「ニューリー・ウエップ」(新婚の夫婦)といふのがあると言つたら、馬鹿を言ふな「おやぢ」の方はジョージ・マクマナスで、「夫婦」の方はその弟のチャールス・マ

クマナスの筆ぢやないかと、一本きめにかゝる人が必ず出て来るに極つてゐる。如何にもそれに相違ない。しかし事實は「夫婦」の方も、初は兄のクマナスが書き始めたもので、それを後に至つて、弟の方に譲つたのである。この故に、ありやうは兄も書いたのだと言つて一向差支はない。

◇
アメリカのロンドンといへば、大抵笑はるゝに極つたものだが、アメリカでも、カナダのオンタリオに人口六萬ばかりのロンドンといふ町があり、アメリカ合衆國の方で、オハイオ州に人口四千のロンドンといふ小さな町がある。

◇
そこで結論はかうなる。イギリスのゼノアと言つたとて、無暗に笑つてはいけない。

——大正十五年一月「文藝春秋」——

林中四日

その他

恐山行

林中四日

一 テント

かうして夕暗の落ちかゝらんとする雑木林の中で、ゆつたりとパイプの煙を吹いてゐる心もちはまたなく宜い。天下を取らうとも、どろぼうをしようともいふ氣が起らぬ。

日は早雲山に落ちた。ひぐらしの聲が雨のやうに樹々に傳はる。樹々を隔て、彼方此方にしつらへたテントから煙が見える。若やかな笑ひ聲が聞こえる。

今日こゝに着いて、事務所から自分等父子に割り當てられたテントといふは、六疊敷ぐらゐのバビリオンであつた。天井の高いのが何よりも氣にいつた。そこへ鐵道局の好意でテント用のベッドを二臺いれてくれた。直ぐ前に小さい新しいテントがあつて、こゝにどこかの若

い細君と息子の中學生と二人が入つてゐる。そのすぐ後には、おくればせにやつて来た若い元氣のよささうな人が、さも物なれた恰好で、樹の下影に板を張り、四方に小さな杭を打つて、見てゐるうちに小さなテントを張つた。これがまづわが隣人といふ譯なので一寸あいさつにゆく。

子供を連れてそこらを一まはり見てまはつた。坂の上、がけの下、僅な平地を利用して立てられたテントが十四五。多いのは十餘人を容れ、少いのは一人ほつち入つてゐる。小田原電鐵から林間になるところに電燈を引いて、その上清冽な山清水道を水道に引いてある。少し下つたところに、早雲館といふ古い温泉宿の湯ぶねを改築して、勝手に一同の入浴するに任せである。

夕飯の支度が何よりも大事なので、まづ停車場で米一升と福神づけと牛肉のかんづめとを買つて歸つた。事務所の側で薪をうづ高く積んで一束三十錢で賣つてゐるのを一束だけ買ふ

と、在郷軍人服を着た若い男がすぐとめてきてくれた。そこへ少年團の制服を着た大學生が、炊事場の穴を掘りませうといつて来てくれた。やゝしばらく風向を見てゐるが、やがて然るべしと思ふところに穴を掘つて、その穴の三方へ石を列べてかまどの恰好が出来た。

米あり、薪あり、かまどあり、飯盒はかねて用意してある。これで一應の世帯道具がそろつたところへ、本社の名倉計畫部長や、北川、岡本、石尾の面々が、飯たきの手傳ひに来てくれた。中にも北川君は飯のたき方なら一日の長とかで、私の子供をつれて米を洗ひに出かける、岡本君は別に湯沸しを一つもつて来てくれる、名倉團長、そこらの枯枝枯葉を拾つてたきつけてくれる、ほとんど朝日新聞社を擧げてのお手傳ひであつた。

火が盛んにもえた。煙がもうもうと木の枝をはつて上る。如何にもキャンプの生活らしい。飯盒問題では初から北川君一人で先輩がつてゐるが、上には上があつて、岡本君もなかなか負けて居ない。子供の報告によると、先刻も水加減のことで二人は争つたさうだが、いよいよ

よ飯盒の湯がふき上つて来た頃、二人は又々争ひ始めて、二十五分おけといふ、二十分ていといふ。そんなら開けて見ようと一人がいへば、開けて見なくても、上からふたをたいて見たら分ると、雙方通をふりまはして譲らない。

とうとう二十五分たいて、おろして、一人はふたをたいて見て、今一人はその上でふたを開けて見て、これでよしと二人が決議して飯盒を逆さにひっくり返して地びたにおいた。

かうして飯をむらすのは八分ていといふのと、二十分だといふのと二説に分れたが、結局取つて十五六分間むらしておいた。それをあけて見たら、上の方はびちや／＼で、底の方はちやんと黒こけになつてゐた。

一同が去つてから、私等父子は食事に着いた。清鮮な山氣に圍まれてゐる故か、びちやびちやとも黒こけとも思はず、われらはむさほり食つた。食事がすんだら。平生無精で通つてゐる子供が、いそ／＼と飯盒とはいしとをもつて、下の清水まで洗ひに出かけた。

自分は今たゞ一人テントの前に居残つて、心のどかにバイブの煙を吹いてゐる。天下を取れといつて来ても、おれは取らない。そんなものはシンシナタスにやる。

二 あけの日

夜一夜吹きに吹いた風は、へう／＼と雑木林に鳴り渡つて物すごいほどであつたが、それでも能く寝られて、この風の音を夢うつゝの界に聞いている。七時過に起きて出ると、空はいつしかからりと晴れて、せみが盛んに鳴いてゐる。昨夜とちがつて、何といふほがらかな朝ぞや。

山清水で顔を洗つた後、寝衣のまま停車場前まで出かけて、温泉に入り朝飯をすませる。かへり途に、丁度東京鳩の會から出張して来た人々が傳書鳩を放つといふので見に行つた。大勢立ち圍んで見てゐる。もう放すか／＼と見てゐるが、居合抜きのだんびらを抜くのと一

所で、氣配だけ見せてなかく放さない。廿羽ほどの鳩に一々信書管をつけたり、かんぢんよりを結びつけたり、またつけ直したり、色々して八時の豫定が九時近くなつて、やつと放たれた。かごの蓋を開けると、一せいに東支とは反対の方向へ飛び去つて、またよく間に行方が知れなくなつた。大勢一所に放つと、兎に角一同そろつて同じ方へぱつと飛び立つて、それから銘々の方向を見定めるのだといふ。何分雑木が空に覆ひかぶさつてゐるところとて、鳥の姿はすぐ消えた。待つ間が長かつたので、殊にあつかなかつた。

テントへ歸つて、物をかいたり、新聞をよんだり、はてはベッドの上に寝ころんで、子供と語る。「昨夜は寝られましたか」と追々尋ねて来てくれる人がある。あの風で吹きたふされたテントが一つあるといふ話を聞かされた。さうかと思ふと、キャンプの中で一番朝寝をしたのはこのテントでしとせと、笑ひにくる人もあつた。キャンプは山の中腹の森の中になつてゐるから、音ばかりで風あたりはひどくなかつたが、吹きさらしのところでは随分あてたの

ださうな。そこへ在郷軍人服を着けた人が二三人どや／＼と大きなかけやを持つてやつて来た。なぐられでもするのかと思つたら、風にゆるんだテントの杭を打ちこんで、綱をしめ直してくれたのであつた。

事務所の方でわい／＼と笑ふ聲がするので、見に行くと、蓄音機をラヂオの擴聲機にたないで、支那の音楽をやつてゐる。その前でかういふところになくてかなはぬ岡本君が變な手つきで支那の踊を踊つてゐる。それを又少し小高いところから北川君が寫眞に取つてゐる。そのまた後からたれやらがこれを活動寫眞に取つてゐる。なるほどわい／＼と笑ひさゝめくはずだ。丁度踊のすんだところへゆき着いたから、今一度やつて見せてくれといへば、また音楽と、岡本君の踊と、寫眞と、活動寫眞とのやり直しをやる。いゝ氣なものだ。

十一時頃から講演が始まる。講演場が丁度私のテントのすぐ下なので、ベッドに寝ころびながら聴いてゐる。キャンプ生活の心得など懇に説いてくれる。自然に歸つたキャンプの土臭い

生活にも、やはり「心得」なんてなものが要るらしい。どこまでも人間はうるさい。

晝近くなつて飯をたく。通人がゐないだけに、今日の方がはるかに上出来であつた。焼の、
り、で晝飯をすませて、寝ころんで書物をよみながら、二人ともいつの間にか寝てしまふ。日
は樹々にさへぎられて風はなけれど涼しい。これでも東京の方は暑いのだらうか。

日のかける頃起き出でて、強羅まで散歩に下りた。公園でブランコに乗つて、千人ぶろに
はひつて、観光旅館の夕飯に二日ぶりの枯腸を醫して山に歸れば、今しも活動寫眞が始まつ
て停車場前は黒山のやうな人ばかり。この活動寫眞のためにケーブルカーは臨時をだしてゐ
る。

かくしてキャンプの第二日は過ぎた。

三 蘆の湖まで

I 兄足下

おのしが一所でないので、朝酒も飲まず、ボーカーもやらす、全く聖者の如き生を、この
山の中で愛兒と共に送つてゐる。たゞシリ・シーズンの新聞の編輯のやうに、毎日々々かん
づめ種ばかりで間に合せてゐるのは、ちとつらい。

今日は蘆の湖へ行つて見ようと、子供を促して朝早くテントを出た。空はどんよりとくも
つて、山の中にありがちな霧雨が、さゝやくやうに降つてゐる。

山鷲を一つ仕立てさせて、いやがる子供を、病後だからとて、無理やりこれに押しこむ。
けにも山鷲には「押し込む」といふのが一番當る。身體を海老のやうに折り曲げて、兩足を
頭よりも高く持ちあげさせる。かうしなければ頭が駕の棟木につかへて、頭のおきどころに
困る。おのしのやうな頭なら、置きどころなんでもよいが、駕の中では、頭を棟木の
右にやつたり左にやつたりしてゐると、自から身體にすわりがないから、ふらふらして、駕

屋がもつての外にかきにくがる。

かういふ説明をしてゐると、駕屋大に感心して、近頃駕がだん／＼すたれて、旦那のやうに乗り方を心得た方は少い。芝居でもなければ見たことのない人だちです、坊ちゃんもさうでせうと笑つた。「芝居に出てくる駕屋といふは大抵悪者だぜ」と茶々をいれたら、「だからですよ」と、駕屋大に乘地になつて「上方からくる御婦人方に限つて、みなさうでせう。だから私共を芝居の雲助と一所にして、こはがつてなかく乗つてくれません」と、また笑つた。芝居の人を誤ること何ぞそれ甚しきやと、おのしならいふところ。

花の頃はさぞ美しからうと思はれる花うつぎの葉が兩側に生ひしけつた細い山道を、おのしを思ひだしながら、登つて行く。間もなく大涌谷の噴煙が見えて來た。もう／＼と立ち昇るゆわ／＼くさい煙の側に小高い丸山みたいなものがあるのを、駕屋が指さして、これは湯を強羅に引くために作つたタンクだつたが、昨年突然爆發した。丁度その時三十餘人の一行が

浴衣がけでこの邊を通りかゝつたが、大變な音がして、ぱつと煙が上つたので、タンクの爆發とも氣がつかず、てつきり函根火山脈の大噴火と心得て、一同は我を忘れて八方へ飛び散つた。何しろ命がけで飛び散つたので、一通りの逃げやうではない。三十餘人が我一と三十個所の方角指して山に登つたのだから、どの山にもこの山にも、青葉の間に白い浴衣の影が一人づゝ見えて、それは見物でしたよとあつた。「全くすまないと思ひながらも、おかしうござんした」と駕屋がつけ加へた。うそをつけ。

大涌谷から姥子を過ぎると、遠くに蘆の湖が見える。間もなく湖尻に着いた。今から十五年前に私がこゝへ來た頃は、これを「ウミジリ」と讀んだことをたしかに記憶してゐる。近頃の新聞によく「コジリ」とルビがついてゐるので、どうも今の若い者は無學で困るなど憤つてゐた。ところが今度來て見ると、たれも彼も皆「コジリ」といふ。何でも六七年前このかたさうなつたのださうな。「ウミジリ」の和やかなのに比べて「コジリ」のこちたき、どツ

ちが日本語らしくてよいかは、おのしにだつて分りさうなものだ。由來物の名の音の善悪に無頓着なのは日本人の弊だ。「國技館」だの、「外國語學校」だの、一體何だ。といったところが、おのしの知つたことでもなしか。

湖尻から發動機船に乗つて元函根に渡る。湖光山影昔にはらず美しいが、出来るものなら、昔のやうに櫓聲のびやかに、ゆらりゆらり／＼こいで行きたかつた。

四 少年團

ある日ロンドンで白國公使を尋ねた歸り途、自動車に乗らうとしたが、どの車も／＼私は反對の側ばかり通り過ぎてしまつて、呼びかけても振り向いてくれない。そこへ可愛らしい十三四のボーイ・スカウトが私の窮狀をそれと察してか、飛んで来て私の用向を聞いて、ちやんと自動車を一臺雇つてくれた。

またある時、フックストンの港務所に用があつて出かけたが、港務所の鐵門が固く鎖されて、たれも入れない。門前には、立ち止まつて様子を見てゐる者や、入るのを拒まれてそのまま居残つて立つてゐる人々が、黒山のやうになつてゐる。制服いかめしく着なした門番にいろ／＼頼んで見たが、てんで相手にしてくれない。(イギリスの門番には、日本と同じで無愛想な分らずやがよく居る)その時門内から群集をわけて一人のボーイ・スカウトが出て来た。いゝ幸ひと、私はこれに名刺を託して、この中に「タイムス」の特派員が來てゐるはずだから、取り次いでくれと頼んだら、快く引き受けて飛んで入つた。それから間もなく又飛んで歸つて、私の前で型の如く舉手注目した後、丁寧に案内してくれた。おかげで私は門番を尻目にかけて、意氣揚々と入ることを得た。

この時からボーイ・スカウトはいゝものだと思はれこんだ。日本にもこんなものがあつたらとまで思つた。何でもベーデンバウルがこれを組織して以來、今までいたづらばかりし

てゐた子供が急におとなしくなつて、人のため、世のため、大變な役に立つやうになつたと、イギリス人は感謝してゐる。

しかしそれは戦亂中子供の仕事のないマーフェキングが、普通教育の一向普及してをらぬイギリスにおいてこそ結構なものだらうが、日本のやうに兒童が一人残らず強制的に學校にやらるゝ國では、ボーイ・スカウトの必要もなからうし、またそんな暇もあるまいと考へられもした。それがいつの間にも日本にも出來て、相當な成績を擧げてゐる。

今度の「朝日」のキャンプにも日本の少年團聯盟が後援していろ／＼手傳つてくれた、テントを立てたり、かまどを掘つたり、荷物を運んだり、さまざまの事に、在郷軍人と共に働いた。西洋のに比べて、「少年團」の名が無意氣で、歌は下手くそで、キャンプ・フッヤは間がひびてゐるが、兎に角彼等は學校では教へられぬ規律と節制と氣轉とユーモアと陽氣と奉仕的精神とを、キャンプの人々に示した。

これならばボーイ・スカウトは日本にもあつてよいし、またあり得る。同時にこの少年團は今の日本の普通教育のまだ補足すべき缺陷のあることを、もつとも雄辯に示してゐる。人間は讀本と十露盤だけで出來るものでない。學校萬能主義の人が陰に反對するのも無理ならぬことゝ思つた。

五 霧の音

昨日は曉方からほた／＼と雨だれの音が聞えて、折ふし風が樹枝をゆする毎に、ばら／＼とテントに落つるしづ／＼が物すごいばかりであつた。この雨では折角思ひ立つた蘆の湖行の望も絶えたかと思つて、試みにテントのたれをあけて見ると、樹の間に月がほんやりとうつんで見えて、立ち出づれば、まばらながらも星の光がもれてくる。雨も何もふつてゐない。あのすさまじい物音は霧の音と知れた。

この邊では霧がかゝるとすごいものだと思つてゐるが、霧の音に夢を破らるゝとまでは思はなかつた。樹立が丸で白絹で包まれたやうになつて、電燈がほんやりとかさをかけて馬鹿に大きく見える。この細かい霧が葉末に凝り小枝に解けて、雨のやうに落ちてくる。霧と思へば、また何となく山居の風情を添へる。

今日もキャンプ・フッヤのすんだ頃から、そろ／＼霧が下りて來た。停車場まで出て見ると、活動寫眞も屋内に引ッこんで、外面は家も人も煙の中に立つたやうで、まぶしい電燈の光もつやけしのやうになつて美しい。ロンドンの夜の町が思ひだされる。

明日は早起だからとて、二人は早くからベッドの中に入つた。子供はすぐ寝いつてしまつた。この人里はなれた森の中のテントの中で、ちら／＼とちらつくらふ、そくの火に、子供の寝顔を見てゐると、ふとフィリップの戦の前夜サーヂスの陣營でブルータスが侍童のルーシアスを寢かせてゐる光景が目に見えてくる。歌ひながら眠りこけた侍童を、怒りもやらず、い

たはり寢させて後、己は明日が日にも戦死と覺悟しながら、心徐かにポリビアスの拔書を始めたところが、だん／＼目に浮んでくる。「われもし存らへてあらんには、汝がために悪くは計らはじ」といふブルータスの獨語が思ひだされて、何だか無上に感傷的になつて、ほろりとする。

このロマンチックな場面は、忽ち時ならぬ人聲でぶちこはされた。何かは知らぬが、森の中で大勢の聲がして、ばた／＼と扇ぐ音、ばち／＼と火のもゆる音が聞える。出て見ると、事務所の前で先刻のキャンプ・フッヤの残りの薪を山と積んでもやし立てゝゐる。それを取り巻いて、がちや／＼語り合つてゐる。いよ／＼今晚でキャンプもお仕舞だから、今夜は夜と共に語り明さうと、若い人たちが集まつたのであつた。

どん／＼と薪をいれる、火は二箇所でどん／＼もえ上る。風がないから煙はすつくと立つて、勢猛にもえたける時は火柱が一丈二丈におよぶ。その先端が細かい火の粉となつて、

暗の中にちらりと消えてゆく。

冬の夜の寒さの時は更にもいはず、夏の宵の暑苦しい時にも、焚火の火の色を見てゐるのは心の慰むもので、これをとりに巻いて夜と共に語りゆけば、自からなる親しみがわく。沖のいさり火、衛士のたく火、鶉飼のかかり火、ボンフッヤ、キャンプフッヤ、ヘラクライトスの天地流轉の源の火、ゾロアストアの徒のおろがみまつる火——火こそ慰むれ。

ましてや、この夜ふけに、この森の中で焚火を取り圍んで語るのは又なき興だ。この物音を聞き傳へて、そここのテントから、追々にわれもくと寝衣のまゝでそつとのぞきにくる。それがそのまゝこゝに居坐つてしまふ。はては若い娘さんまでが加はつた。火はもえさかる、話がますますはずむ。この火で湯をわかつて茶をいれる、菓子が出る、いつまでも興の盡きるを知らない。

霧はますます深くなつて、森林の中はさながら、雨のやうな音を立てる。森の下影を出離

れると十五夜の月が霧の中にほんやりとその姿を見せてゐる。いつになつたら、彼等若人は焚火をやめて寝ることか。

——大正十五年八月「東京朝日」——

恐 山 行

一
 青森の講演をすませて後、恐山まで行つて見ようといふことになつた。同行は下村と刀禰館と横山と杉村と四人。自分は青森から更に北に進んで、名からして恐ろしさうな日本の本土の北の果を極めるといふことに、いひ知れぬ興味を覺えた。

青森から東の方野邊地に出で、こゝから大湊線に乗りかへて北へ北へと進む。满目荒涼、樹も何もない枯野で、人も家も見えない。日本にもこんなばつとしたところがあるかと、思ふほど大陸臭い。野邊地から大湊まで三十六マイルの間に停車場が四つしかない。有戸驛と横濱驛の間などは十二マイル七分といふ、内地には珍しい長丁場だ。

道が悪いのか、車が不出來なのか、それとも風が強いためか、列車はべらぼうに揺れる。乗客一同が機械仕かけのやうに前後左右に一せいに揺れてゐるのを徐かに客観してゐると、われ知らず吹きだしたくなる。用心してゐないと、隣の客と頭をかち合せ、窓ガラスへ頭を打ちあてさうな。これがいゝ運動になつて腹がすくと、心細いまけ惜みを皆々申す。海南歌うていはく

大湊へ荒野を横ぎる豆汽車の足おそくしてひたゆれにけり

鐵道の役宅のみが三つ二つ見えて木枯は海にぬけたり

ゆけどくたゝ赤ちやけし牧場なり馬も人もあらず木枯吹きて

大湊の一つ手前の田名部といふに車を下る。田名部は昔會津の落人を迎へいたはりしところと聞くがなつかし。

二

田名部から自動車に乗る。先方までゆき着けるかどうか請合ひかねるとやられる。

汽車でさへあのゆれ方であつたから、自動車のゆれ方は察するに餘あり。がツくりと溝のやうにおちこんだ二條の輪立の跡へ踏みこませまいと、車は右に左に首をふりながら進む。右に傾くと見て左に身を寄せると、今度は左へどうと倒れさうになる。ヤツと眞直に立ち直つたと思ふ間もなく、デコには車がほんとは飛び上つて、頭を母衣へうちつける。ボコにはぐツと車の身を沈めて、ともすれば前へのめる、いゝ運動になるともいはれず。

芝居に出てくる婆のかぶるかつらの毛のぬけかゝつたやうな落葉松と、澁紙をもみくちやにして下手な造花師が葉のつもりでくツつけたやうなくぬぎの枯葉との間を、いづこまでもと自動車が出る。一里半ばかり来た頃、忽ち馬の脊のやうなところに出て、右には太平洋の波路遙な大海原、左には青森灣の長汀曲浦が見える。大湊は脚の下の山の間に落ちてある。

三

こゝを過ぎると、杉と檜の物ふりた木立の中にかゝる。日の目を通さねばや、道ぬかるみて車進まず、タイヤに鎖をゆはひつけて、辛うじて進んだが、とう／＼あと五十町といふところまで来て、車はどんぶりと泥の中におちこんでしまった。仕方がないから車をすて、歩きだす。三十町を上つて二十町を下る。下り坂にかゝると、どこからとなくふんとゆわうの香がする。

山の端をめぐれば高きゆわうの香恐山近しとおもほゆるなり
と海南歌ふ。さすがの海南もこの時は、やれ／＼とおもほえたらしい。

湯坂といふの下ると、世の中ますますゆわう臭くなる。間もなく山を出離れる。眼界はツと開けて湖水が見える。ウソリ湖といふ。

ウソリとはゆわいの香に避易して、飛んでゐた鶴がこゝを連れて飛んだからかく名づけたと、圓通寺の縁起には書いてあるが、恐らくウソリ湖のウソリも、恐山のオソレも、追分節に出てくる「忍路高島」のオシヨロも、遠くはシベリアのウスリ川のウスリも、皆アイヌ語のウシヨロ(灣の義)から来た同一語源のものであるまいか。序にイタリー首相ムソリニもこの邊に片づけておくか。

いよ／＼ウソリ湖畔に出ると、湖水のはけ口に三途の川といふがあつて、その少し先に畜生地獄といふ池がある。白く濁つた水がほく／＼とわき立つてゐる。この邊一面ほとんど草も木も見えない。湖水の濱邊の砂が、さながらされかうべの碎けたやうに馬鹿に白くて、如何にも鬼氣人を襲ふやうな。如何さまはじめてこゝへ来た慈覺大師がこの様を見て、地獄とはこんなところと、極めてしまったのも無理ならず。

湖岸をぶら／＼とやつてゆくうち、前に乗りすてた自動車は勢よく追ッかけて来た。ウソ

リ湖は海拔約七百尺、二千尺近い山越でくるのだが、それを自動車で往復が出来て、湖岸に恐山ホテルが立つてゐるなど、恐山も来て見れば、存外恐ろしからず。

もつとも湖水を取り圍んで、人間の住む家といふは、このホテルと圓通寺といふ禪寺があるきり。さみしいの何のいはうやうもない。少し大きな聲をだせば、それがぐわんと返響にひびき渡る。

「おうと呼べばおうと答ふる山ひこの」かね。「答ふる聲は人の呼ぶ聲」かね。

四

圓通寺に在る。境内到るところに温泉がわいて流れて、ゆわ／＼くさい煙がところ／＼に立つてゐる。だゞ広い中に本堂や浴室や合宿所がほつ／＼と立ちならんだきり、一本の樹もなければ、草の葉の青一點も見えぬ。折しもかん／＼と鉦の音が傳はつて晩課の讀經の聲が聞

える。「境内には木一本もなかりけり砂地一面のゆわうのけむり」と海南歌ふ。

恐山寺と染ぬいた法被姿の可愛らしい小僧に導かれて、山内の名勝を見てまはる。慈覺大師の供養塔、自作の木像、座禪の跡などは、いさゝか名勝らしいが、そこら中にぶつ／＼わいてゐる小さな温泉に一々名があつて、その名が又奇抜を極める。尺に足らぬ海鼠形の穴を指して、海鼠の地獄と申しますとある。海鼠に砂を交せて目方をつけて賣つた魚屋がこゝに落ちたといふ。どん／＼と太鼓のなるやうなのが法華宗の地獄、ちやら／＼と錢の音のするのが女郎屋の地獄、夜になつてあばれだすとお客の地獄。何だか知らぬが、やたらに地獄が多い。極樂の濱といふところが、たゞ一つある。

湖水を取りまいて立ち圍む火口壁の山々が八の峰に分れて、八朶の芙蓉に象どるといふ。その一番高いのが釜伏山とて海拔二千七百尺、これが日本の火山中でもつとも近く噴火の恐があるところだと、縁起でもないことをいふ者がある。

一まはり見て歩くうちに日が暮れかゝる。珍しやからすが鳴いてゐる。恐山と東京とは緯度が六度も違ふので、暮れるのが三十分ばかり早いさうな。暮れきらぬうちにと、恐山ホテルに引きあける。ホテルには影の淡いランプがついてゐる。

五

何は兎もあれ、一ふろ浴びる。ゆわう、色に濁つた温泉につかつて、四人で愚にもつかぬ話をしてゐると、いつしか日は全く暮れて、外には寒さうな三日の月が見える。いゝほどに温まつて夕食の膳に着く。あの汽車と自動車とにさんざゆりまくられた上、疲れた足を引きすつて地獄めぐりをしたことゝて、何を食ふとしてか旨からざらん、熱かんの酒がきゆうと腸にしみいる。斗南半島の山中の冬とも覚えぬのどかさである。縁側に出ると、夜静かにして四邊に一點の燈光を見ず、ほやとした月影に湖の水が白い。

本土とは申しながら、この邊は青森よりも北海道の方に親しみがある。船便を利用して物資の供給を北海道に仰ぐことが多い。大湊からこの半島を横断した運河を掘つて、そこから函館通ひの船を仕立てたら、今の聯絡船に要する時間の半分で往復出来ようと考へた人さへある。

起きてゐても何のせんやうもないから、八時頃に床を取らせて寝る。湯のほとほりいつまでもさめずして、夜一夜暖かさを覺えた。

みちのくの南部のはての恐山、宇曾利の沼の片われの月（海南）

このランプは暗いねといひてランプの火を明るしと思ひし昔しのびつ（海南）

六

疲れたればや、したゝかに眠る。未明に起き出でて温泉につかる。湯殿から廊下へかけて

一夜の間に湯氣もうくと立ちこめ、かはやに入れば下から生暖かい湯氣が上つてくる。外を見やれば四邊に樹も草もない湖水は、その面さながら死せるに似たり。またしてもからすがなく。

朝食したゝめて後自動車を一まづ田名部にかへして、こゝから大湊に向ふ。

町から遠く離れた手前に、大湊ホテルといふホテルが立つてゐる。こんな不便なところへ立てゝまうかりさうもないにと笑へば、否々、大湊が軍港だか要港だかになると聞いて、またゝく間にこの邊まで町が發展してくるものゝやうに思つたその當時の名残だと、海南説明してくれる。如何さまさういへば、その頃の大湊は、漁村が一躍して三府五港の一にでも加はる位に考へられたものらしい。思へばアメリカのヒュースが恨めしい。

大湊の町を一巡して車を停車場の方にかへす。要港部の官舎のあたり櫻もみぢもゆるが如く染めなして、その下にはこの邊にふさはしからぬ都めかしい子供が三々伍々遊んでゐる。

りたがのもろころこ

その他

小景 三四

よもやま

烟のゆとり

行 山 恐

世の興亡も知らぬけに、隨處に遊び得る子供がうらやまし。

時間が餘るので停車場前の、とある小料理屋にいらして休む。これがそもく魔の小料理屋で、四人で鍋やきうどん一杯つつ食つて、その勘定金二圓拂はせられる。鍋やきうどんなど註文した者の氣が知れない。

——大正十五年十一月「東京朝日」——

ころころものがたり

○
一年同郷の宴會が紅葉館で催された。軍人上りの先輩の何がしいふのが、立つて開會のあいさつといふのをやつたが、中氣の氣味のある人のまはりかぬる舌で、くどくどと長い何の、いつはつべしとも見えない。平生からあまり行儀のよくない僕はとうとう我慢しきれなくなつて、まづ膳の上の小芋を一つつまんで食ひかけた。ところが、この芋がぬると箸の間がらすべて疊の上におちた。しまつたと思つたが、もうおそい。まん丸い小芋は落ちた勢でころがりだしてころくるとどこまでもころんでゆく。とうとう大眞面目で演説してゐるその先輩のテーブルの前までいつて止まつた。

あの紅葉館の大座敷で、一同水を打つたやうに静まりかへつてゐる真中へ、小芋が一つこ
ろけだしたのだから、みなく僕顔を見てふきだした。さすが厚顔の僕も全くあの時はし
よけた。

○
臺灣の友人から雪柑を一函新聞社まで送つてくれた。子供が好きだからと思つて、三四十
新聞紙に包んで、大森の宅まで持つて歸らうとした途中、汽車を下りて八景坂の上まで來る
と、包のひもが切れて雪柑が二つ三つ飛び出した。

地球より丸い雪柑のことだから、飛びだすが早いか、ころくくと八景坂の傾斜を下りはじ
めた。初は二つ三つであつたが、これを追ひかけてゐる間に、また落ち、また落ち、何十と
いふ雪柑が相ついで坂をころがりだした。それがあの長い八景坂をとめどもなく轉けるのだ

から、僕は全くもつて奔命につかれた。

夜のことゝて見てゐる人がゐなかつたからよかつたものゝ、大道のまん中へ半しやがみに
しやがんで雪柑を拾つてゐる恰好といふものは見せたかつた。

○
朝日世界一周會の一行と共にロンドンに行つた時のこと。ある日チェアリング・クロース停
車場に出かけると、その賣店で掏摸よけのゴムの小さな輪を賣つてゐた。この輪を時計の
環にはめると、ゴムのぎだくが衣囊に引ツかゝつて、如何に外から鎖を引ツばつても時計
がぬけない仕組になつてゐる。

これは面白いと思つて、一つ二つ買つて、ホテルに歸つて、同行の人に見せたら、大阪の
唐物屋さんが、是非買ひたいから連れてくれとのことだ。そこで二人は又停車場に出かけて

賣店にある限の何ゴロスといふものをこたく買ひ上げてしまつた。

それを紙に包んでもらつて停車場を出ると、丁度停車場の前であひにくと包のひもが切れ
て、何千といふ小さなゴムの輪がぼつたりと石疊の上に落ちた、ゴムが石疊の上に落ちたの
だから、ぼつとはね上つて、八方に散らばつた。

にぎやかなロンドンの中の、その最も人通りの多い賑やかなチェアリング・クロースの停車
場の前で、二人が恥も外聞もかまはず、中腰になつてこの八方に飛び散つたゴムを拾ひ集め
てゐる様は、あんまりいゝ恰好のものぢやなかつた。

しかしさすがはロンドン。立ち止つてほんやりと見てゐる人はほとんどなかつた。立ちど
まつた人は必ず一つか二つ拾つて渡してくれた。

○

千九百十二年か、三年のある日のこと、この同じチェアリング・クロースの近くで、二千四
百個の銅貨を入れた函を車から落して、函がこはれた拍子に銅貨が大道へ落ち散つたことが
ある。一時は往來もとまるほどの騒になつて、こゝへ來合せたものは老幼男女を問はず、こ
とごとく寄つてたかつて、この金を拾つてくれた。

後で勘定して見たら、たゞの一錢も不足してゐなかつたといふ。これがために「タイムス」
は一日の社説欄を割いて、市民のイギリス人らしい心がけをたゞへた位である。もつとも銅
貨だつたから、一個も不足しなかつたが、金貨だつたら、いくらイギリスでもさうは行かな
かつたらうと、アメリカの某記者はひやかしてゐる。

○

京都にゐた時、黒谷に本願寺の法會があつて、その頃本願寺の學校に勤めてゐた僕は、生

徒を率ひて参詣したことがある。

法會の式次第のうちに乗僧の行列といふのがあつて、法主をはじめ大勢の僧が紅紫の色どりきらびやかに練つて歩いた。その練り方が馬鹿にいうちやうなもので、のろり／＼と中々進まない、五分や十分は一つとところに止つてゐるかときへ思はれた。残暑のきびしい秋の初のでりつける日影をあびて、にこりともせず大眞面目で練りゆく坊さんもなか／＼えらい。その大眞面目な中へ、たちまち小さな赤とんぼが飛んで来て、そこらを飛びまはつてゐた末、とある坊さんのでか／＼した頭の上にとまつた。見てゐるものはくす／＼笑ふ。坊さんはせかすあわてず徐かに中啓をとつて追ひ拂ふが、追つても／＼又來てとまる。笑ふに笑はれず、さうだらしなく中啓をふりまはすわけにもいかぬ。坊さんは、くすぐつたいやうな、いかめしい顔をして、頭にうや／＼しく赤とんぼをのせたまゝしづ／＼と。

—大正十四年八月「週刊朝日」—

小景三四

○ 乗合自動車の女車掌は、回数券を客から受け取ると、これを丁寧にたゞんで何枚か一時にはさみを入れることになつてゐる。ある時客が一圓紙幣を出したら、うツかりしてゐた車掌はこれを四つにたゞんで、はさみを入れかけて、はツと氣がついた。よく／＼きまりが悪かつたと見えて、急いでこれをカバンの中に押しこんだ後、たれか見て居りはせぬかと、そツと四邊を見まはした。その目が先刻から見てゐた私の目とばかり合つたので、女はさツと面を赤らめてほゝゑんだ。

それで思ひ出すが、元の新橋停車場のまだあつた頃、發車間際にあわてゝ出札場にかけてきた若い藝妓風の女があつた。いきなり錢をつかみ出して、行先もいはずに「切符早く」とどなつた。出札係の女が「どちらへ」と尋ねたら、氣のせか／＼してゐる折に出札のおちついたのが癪にさはつたか、それとも平生行先など人に問はるゝのが、ひやかさるゝやうに聞きとる癖になつてゐたせいも、件の女は前後の辨へもなく「どちらへ行かうと大きにお世話だ」とやつてしまつた。言つてしまつてから氣がついたが、もう遅い。その時の藝妓のきまりの悪さうな顔といふはなかつた。

○

地震の時葉山の御用邸の石垣がくづれて、丁度その下に釣をしてゐた幼い兄弟の方へ落ちて來た。兄はいち早く身を以て辛く脱れたが、十歳ばかりの弟の方は石の下敷になつた。後に大勢してその死體を掘り出して見たら、その兒の釣針には、小さなふなが一尾かゝつ

てゐた。

○

神田停車場のプラットホームの側で、大勢の工夫が聲を合せて、何やらん大きな鐵の棒を引き起して、これを線路ぎはの土坡に立てかけようとしてゐた。ヤツと引き起してから、いよいよ土坡の方へ寝かさうとする段になつて、一人の工夫が「待つたく、大變だ」と呼ばはつたので、一同は思はず手を止めた。見るとその土坡に朝顔の花が一輪さいてゐた。たれひとり苦情をいはずに、工夫たちはさも當然のことであるかのやうに、わざ／＼この一輪の朝顔の花を避けて、その横の方へ鐵を寝かせた。

——大正十四年九月「主婦之友」——

よもやま

○
或る夏の一日。

ベッキ屋が電車の停留場でベッキの鎌を道ばたにおいて、電車の来るのを待つてゐた。そこへまつしぐらに自動車走つて来て、あなやといふ間にベッキの鎌を輪にかけた。その拍子に青色のベッキがバツと四方へ飛びちつた。
丁度その時、白麻の洋服を着て同じ停留場に待ち合せてゐた若い男が、頭からこの飛びちつたベッキを浴びて、見るうちに白麻の洋服は一面に青い紋ぢらしにそまつた。
見てゐた人は笑ふにも笑はれず。

○
それだけでも話の種だが、その後に物語がつゞく。
右の自動車の主といふのが、さすがに作法を心得た人であつた。かくと見るより急ぎ自動車から飛び出して、あいさつもろくくせず、この洋服男を自動車に誘ひ入れ、そのまゝ自分の事務所へ連れかへつて、こゝで新しい白麻の洋服一着を何處からか手に入れて、これに着せた。

このゆかしい計らひで、洋服を青色にそめられながら、ぢろくくと人に見らるゝうき目を免れたばかりか、ちゃんと通勤の時間に間に合つた。

○
銀座の資生堂の前で、藝者風の女が買物にでも出て来たとおほしく、ふだん着のまゝで歩いてゐた。

見ると腰まきのつけ方が悪かつたか、裾から下へ一寸ばかりはみ出して来てゐる。それが歩く毎にだんだんとすり落ちて来て、安物のメリンスの友仙模様がする／＼と出て来る。女は気が氣でないらしいが、まさか大道のまん中でお腰のしめかへも出来ず、さりとて急いで歩いては、落ち行く腰まきに尙勢をそへる。

女は眞赤になつて正に途方に暮れてゐるので、見まじきものを見た心地がして、そのまゝ行き過ぎた。その始末がどうなつたことかと、今に氣になる。

○
小綺麗なみなりをした主婦さん風の女が、急いで電車に乗つたはづみに、懐中から小さな焼芋が一つころけおちた。

女は、きまり悪けにあたりを見まはしたが、たちまちその芋を下駄のうらでぎゆ／＼と踏みつけた。さながら出てはいけない處へ出て来た者を成敗でもするやうに。

○
「蠟石細工、金指輪」と呼び賣り行く二人づれの支那人が、東中野のとある小路の生垣のそばで立ち止つた。

垣根の中ではチュウチンチャウの妙なる一くさりが聞える。この思ひがけぬ處で思ひがけぬ故國の曲を聞いた二人は、たがひに顔見合せて、いとほゝゑんだ。

○
前年フランスから傳書鳩を日本へ送つて来たことがある。

ある日その鳩を一齊に放して見たら、たちまち東の方へ飛び去つて、行方知れずになつた。鳥は放たると共に、フランスの方に向つて飛んだのださうな。無論途中で皆死んだ。

——大正十五年三月「郊外」——

烟のゆとり

○
 ボストンからワシントンに出る汽車の中で、喫烟室を兼ねたクラブ・カーに入つて、新聞を
 読んでみると、得ならぬシガラの香がする。コロナコロナなどいふ安烟草(！)の香でない。
 あんまりいゝ香なので、ふり返つて見たら、身なりの太してよくもない黒奴がふかしてゐる
 のであつた。

金もありさうには見えぬ黒奴があんなシガラを吸ふとは生意氣千萬なと思つて、尙よく見
 ると、その黒奴のすぐ隣に立派な老紳士が坐つて、これが黒奴のふかすシガラの香をひたも
 の食り喫いでゐた。

○
 恐らく身體の具合で醫者から烟草を止められたが、好きな道として、すつぱりとやめる譯に
 は行かず、そこで召使の黒奴に吸はせて、自分はその香ばかりをかいで楽しんでゐるものら
 しかつた。
 アメリカ人と一つかみにいふが、アメリカにも話せるのが居ると、それを見てゐた友
 だちの話。

○
 私の友人に長いこと胃をわづらつてゐる人があつた。ある時ある人から胃病の名醫といふ
 のを教へられて診察を受けに行つた。
 この醫者一わたり右の友人を診察した後、烟草を吸ふかと聞いた。烟草などは一切吸ひ
 ませんと、やゝ誇らしげに答へたら、その醫者案外にも「それではこれから少しお吸ひにな

るが宜しい」と勧めた。

○
その醫者の説明では、煙草を吸はぬから、自然にさみしくて間食あだ食をする、それが何よりも胃に悪いとのことであつた。

勧めらるゝまゝに、無理に煙草を吸ひ習なつて、ふかしてゐたが、果然胃がだん／＼よくなつて、近來めつきりと肥ふえて來た。

さすがに彼は名醫であつた。死中に活を求むるの道を心得てゐた。

○
西洋にゐる時よく人の家の晩餐に招かれて、レデーの隣に坐らせられる。下手へたな英語で、食事中隣のレデーと始終何か知ら話してゐなければならぬのは、随分苦しい。食事がすんでレデー一同が、つと立つて席を外はずした後、男ばかりが居残つて、シガーを吹かす時ほど、氣

がのび／＼して嬉しいことはない。晩餐の最も美なるところは正しく此の時に在りとまで、私は思つた。

○
これは私が下手へたくそな英語を使はなければならぬ爲とばかりと思つてゐた。

ところが、ロンドンで或る人の晩餐によばれた時、食事がすんで、レデー一同が引き下つたのを見るが早い、一番年の若いお客の一人が思はず「はア！」と大きなためいきを吐いた。如何にも助かつたといふやうに。

○
これで一同はどツと笑つた。無論その時一同の手にはシガーが渡つてゐた。

○
日本の宴會にスピーチとレデーのないのが何よりの美點だと、私はしみ／＼感じた。

——十五年九月「郊外」——

朝鮮の火田民

朝鮮白馬江にて

錦江に臨める巖これむかし
白馬を餌にして龍を釣りしところ

朝鮮の火田民

だれの山でもかまはず、これに火をつけて焼き拂つた後、その跡へ畑を作る、これを火田といふ。焼き拂つた當座はその灰と多年の腐土ふつちと落葉らくえつとで肥料が利いて、作物もよく出来るが、三年とたち五年と経るうちに、だんく、肥料分がなくなつて物の出来も悪くなると、又新しい山を見つけて焼き拂つては、そこへ移る。これを火田民といふ。

かういふ火田民が朝鮮全土に渡つて六萬五千二百戸、三十一萬二千人におよび、その耕すところの火田十四萬千八百町歩と稱せられる。別に火田と熟田とを合せ作つてゐる者の數が十六萬四千戸、その人口八十三萬七千に餘り、耕地面積二十六萬町歩とある。兩方合せは大

變な數になるが、何分山を追うて移住して行くのであるから、この數は大してふえもしなければ、へりもしない。

いくら何人の山でもかまはぬといつたところが、さすがに所有主のちやんと分つてゐる私有林までは焼き拂ふわけに行かぬから、火田は私有林の多い南朝鮮に少くて、國有林の多い北の方に多い。それも人里近い處は、何人も手をつけ易くて早くから荒されてゐるから、次第に山奥へくと進んでゆく。現に今日最も高いのでは、海拔五千尺の山の上に開けた火田がある。火田面積を道別に見ると、慶尙南道の二百町歩、忠清南道の百町歩が一番少い方で、多いのは、江原道の五萬七千町歩、咸鏡道の八萬五千町歩である。人口も慶尙忠清の二三千から始まつて、多いのは、江原道の二十萬人、咸鏡道の二十四萬八千人を擧げる。

朝鮮では昔から山林を無主公山といつて何人の所有でもない、何人が勝手に使つてもいいものとなつてゐた。火田民が勝手に火をつけて山林を荒廢させることには、朝鮮でも昔から

困りぬいて、これが制止に一方ならぬ苦心を重ねたものであるが、何分例の無主公山思想が朝鮮人の頭に根深くしみこんでゐて、如何ともすることが出来なかつた。總督府時代になつてから、法令で新に火田を開くことを禁止して居るが、人も通はぬ山の奥ですることゝて、なか／＼この禁令が行はれない。

火田の取締を嚴重にすると、よく火田民連署の上で、陳情書を差しだしてくる。われら「陛下の赤子」が何だとか彼だとか、いつてくる。われらを無主公山から追ひ拂つて食へなくなつたらどうしてくれると、いつてくる。山林保護もさることながら、一體樹木は人間よりも尊いものであらうかなど、いつてくる。その陳情書がなか／＼の名文である。何でもこんなものを書くのを商賣にしてゐる者があるのだといふ。

人知れず山林を焼き拂ふから、朝鮮でうツかり山を買ふと、ひどい目にあふことがある。賣買契約の上にはちやんと立木何萬本とあつても、實地見分に出かけたら、いつの間にか綺

麗に焼き拂はれて、何人とも知れぬものがすまして火田を作つてゐたなどいふことが、ときどきある。

二

京元線の鐵原驛で汽車をすて、こゝから金剛山方面に向ふ電車に乗りかへると、線路の右側の山々には、恐ろしい急こうばいの傾斜地に、ずつと畑が作られてある。あれが即ち火田なるものだ、乗合の人が教へてくれた。

急こうばいなどは火田民の意とするところならず。どうせ山を焼いて畑を作るのだから平地のやうなわけにゆかぬ位のこととは最初から承知してゐる。その傾斜が三十度におよぶ位のは一向珍しとしない。もつとも甚しいのになると、黃海道あたりには五十度に餘つたものがあるといふ。五十度といへば、一ポイント三分の一で、函根の鐵道の一番ひどいこうばいがあるといふ。

四十分の一であるに考へ合せると、大凡の見當がつく。これでは、さながら畑が頭の上から落ちて來さうに思はれるが、火田民の間には、父祖傳來の獨得の耕作法があつて、どんなひどい傾斜地でも、巧に牛を使つて綺麗に畝を作つて行く。

牛ばかりでない、すきでも、くはでも、火田民には特殊の頑丈な農具が備つてゐて、内地の農民が苦にするやうな切株や石ころの上を平氣ですいて行く。別に又火田民の間に盛に行はるゝ「水碓」と稱ふる一種の水車があつて、これで水を引いて穀物を始末する。火田のつづいた土地には、この水碓が又列をなしてつゞいてゐる。

火田を開くには、まづ瀾葉樹の多い南向きの山を選んで、秋冬の間に樹を切り倒したり、樹皮をはいで枯らせておく。翌年の四五月に、時分はよしと火をいれる。この火が風の模様で思ひがけぬ方へもえ擴がつて、大きな山火事になることもある。火が消えた後は、多少切株が残つてをらうが、もえ残りの木があらうが、そんなことには頓着せず、直ぐ種子を下す。

氣の短いになると、一方に火の氣がまだ残つてゐるのもかまはず、片方で早く種をまくことさへある。極端な疎放的農業である。

こゝで作るのはあはとじやがいもとからす麥が主要なるもので、その外に小豆、そば、大豆、たうもろこしも作る。もつとも多いのはじやがいもとからす麥とを一年交代に作ることである。收穫は一反歩からあは一石二斗を産するのが最上で、もつとも少いのは二斗しか取れない。何分山野に自然に存在した土地の養分をあてにして作るだけで、その外一切肥料を施すことはないから、畑を開いて四年目には收穫が半減する。そこで三四年作つては、五六年の間休耕して又始めるところもあるが、總じて火田の壽命は一年から六七年までの間で、年が立つに従ひ、いよく收穫が勞力に報ゆるに足らずと見究めたら、彼等は思ひ切りよく、さつさと農具を運び、親子夫婦相携へて、他所へ移つてゆく。その様あたかも山窩の徒かヂブシーに似たり。かういふ浪々の火田民を一には「山浪」ともとなへる。

火田民がどうして出来たかは話が古い。「畑」といふ字が火田の二字を合せたものであるのを見ても、それと知られる。原始時代の農業はどここの國でも大抵火田から始つてゐるので、火田はどここの國にもあるにはあつたが、朝鮮では例の無主公山思想から、山野の利用を民衆の自由に任せ、むしろその開墾を奨励した時代があつた。そこへ、世を免れて山野に隠れんとした者、亂を避けて山に逃げて來た者、敗殘の徒、失職の輩が、何よりの樂天地として來り加はつたので、朝鮮の火田は年と共に開け、今日つひに何ともかとも始末におへないものになつてしまつた。

三

火田民は自分の作つたものを食つて生活してゐるが、貯へて他日に備ふるといふことを丸で知らぬ人々として、有る時は有る限り食つてしまふ。あはが取れたらあはばかり食ふ、じやが

いもの出来る間はじやがいもばかり食ふ。半分づつ残しておいて混ぜ合せて食ふこともしない。あはばかり食ふといへば、あのばさ／＼した油氣のないものを、よくも三度々々食べたものだと思はれるが、あはの種が違ふのか、それとも永年の経験で料理の法がいゝのか、兎に角、火田民のあは飯は内地のあは飯と違つて、さう食へないものではないといふ。

あはもじやがいもも小豆もそばも食へる限り食つてしまつて、いよく食ふ物がなくなる。樹の實を採つて食ひ、その皮をはいで食ひ、根を掘つて食ふ。火田民の居るあたりのならの林に行つて見ると、どの樹にも人間の身の丈ほどの高さには、樹の皮がむけて、幹に大きな傷がついてある。一本残らずさうなつてゐる。これはならの實のどんぐりが出来る頃、石で樹の幹をたゝいて實をゆり落した跡だといふ。かういふ樹の實や根や皮の外に、山菜と唱へて野生の草を食ふ。朝鮮人は一般に野草をよく食べるが、火田民は殊にひどい。ところが、食ふべき樹も草もなくなつた時は、水ばかり飲んで寝てゐる。これをクルモツンといふ。そ

のうち何とかなるだらうとすましたものである。實際水ばかりのんで寝てゐると、近所の者が親類の者が必ず何とかしてやりにくる。そこが朝鮮の面白いところとでもいふか。

かういふ状態だから、火田民は大抵栄養不良のために顔の色が青い。それでゐて、子供が馬鹿に多い。貧乏人の子澤山といふことを、もつとも雄辯に説明してゐる。總督府の營林廠で調べたところによると、一家八人でやゝ裕福な生活を営んでゐる火田民の一ヶ年の生計といふのが、僅に四十八圓七十錢といふから、それほど裕福ならぬものゝ生活程度は、ほゞ察するに足りる。今この四十八圓七十錢の内譯を聞くと、衣服費二十圓、副食物(おもに食鹽)十三圓、面(村)費二圓七十錢、畜産組合および農會費五十錢、里洞(村の小字)費二圓、これに雜費が金十圓なりとある。

こんな生活程度であるから、米の飯など見たこともないのが随分ある。先年江原道内務部長小西恭介氏が管内の火田民巡視に出かけた時、さる火田民の家で辨當をだして食へ始めた

ら、近處の子供が大勢寄つて来て、如何にも好ましさうにその飯をのぞきこんでゐた。わが小西内務部長はこの有様にあはれを催して、自分が一飯の我慢さへすれば、この大勢の子供をどんなに喜ばせ得ることかと思ひついて、一旦とりかけたはしをおいて、その辨當をそっくり子供にやつてしまつた。子供たちは忽ち歡呼の聲をあけて、どこへか行つてしまつた。ところが、やゝ暫くしてこの子供たちはわい／＼いひながら、どこからとなく歸つて來た。さうして銘々に花束を一つづつ持つて來て、小西君にさゝけた。彼等を見たこともない米の飯を小西君からもらつた、せめてもの禮心に、一同山に分け入つて、野花を摘んで來たものであることが分つた。これには小西君もほろりとさせられて、野獸のやうな生活をしてゐる火田民の間にも、人情はかはらぬものと感じ入つたさうな。

この美しい一小話をもつて、この火田民の稿を終ることとする。

—昭和三年七月「東京朝日」—

旅に寄せて

—旅の海上港香—

旅に寄せて

——香港上海の旅——

一 退屈志願

何も読まず、何も書かず、何もせず、何も考へずに、たゞほんやりと暫く暮して見たい、出来るものなら、退屈といふことを一度して見たい。

世の中がだん／＼せち辛くなつて、なか／＼退屈などしては居られない。自分にしても、讀むか、書くか、考へるか、必ず何かしてゐなければ立つて行けない。何もせずに暮さうとすれば、さし當り電話のかゝらぬ國、新聞のない國、人の尋ねて來ぬ國、手紙のとゝかぬ國を求めなければならぬが、そんな國はさう手近にない。これを求めて山の中の一軒家に引き

籠つて見たこともあるが、さて一軒家となると、水を汲んだり、飯をたいたり、床を取つたり、相應に忙しい用事がそれからそれへと起つて、なか／＼以て樂は出来ない。

山の中の一軒家の宿屋を求めて引き籠つたこともある。飯の用意や寢床の心配はいらぬかはりに、宿の主人が来る、番頭が来る、女中が来る。折角いゝ鹽梅に退屈しようと思つてゐるところへ、番頭がの、そのいはひつて来て、どうも御退屈さまでせうと言ひながら、一かど人の相手になつて退屈させまい算段でも出来るやうに、愚にもつかぬ話を始めて、人の退屈の邪魔をひろぐ。折よく退屈しかけてゐるところだから歸つて呉れともいはれず。

自分の友人に某といふ本願寺の坊さんがあつた。或る時どえらい片田舎のお寺へ出張を命ぜられて、ほつねんと客間の上座にたゞひとり座つてゐると、唐紙一つ隔てた隣の座敷で、村の權兵衛太郎作が何やらんひそ／＼と評定してゐる。聞くともなしに聞いて居れば、折角御本山からお出になつた客僧を、あゝしてお一人うツちやつておいてはすまない、たれかお

相手をする者がないかとの相談であつた。そのうち一同から選ばれたとおほしい一人の男がおつおつと出て来て某の前に座つた。一應のあいさつがすむが早いか、その男突然「あなたの方には狼が出来ますか」とやつた。あまりの突然に某も面喰ひながら「いや、わしの方には出ないが、この邊には出るかね」と反問すると、その男さもわが意を得たりといふやうな顔をして、「いやこの邊にも一向出ません」と答へた。それで二人の問答は首尾よく終つて、その男は丁寧にお辭儀をして出て行つた。これがその男の一生の智慧をしほつて、客僧の退屈を紛らさんとする話相手となつたのであつた。これはわれ／＼の仲間で、某の狼問答として傳へられた一條の笑話であつた。

山の中の一軒家の宿屋の番頭の話相手といふも、大抵この類だ。狼ありや又否や、曰く無しと聞いて、そのまゝ引き下がつて行く位ならまだしも、番頭の話に至つては、より愚にして、より長い。助かることならんや。

それからいろいろ考へた揚句、どこまでも人間臭いものゝついてまはる日本の土地では退屈など思ひもよらずと悟つて、いつそ海外へ船で行つて見たらばと思ひついた。

二 試験妨害

船を選ぶには別の理由もあつた。今年中學の四年にゐる五男の文が四男の兄の武をまねて、無上に高等學校に行きたがる。長男二男三男を次ぎ／＼に失つた自分は、子供のことゝいふと極度に臆病になつて、たゞも達者でゐてくれさへすれば學校などはどうでもいゝ位に考へて居る。だから平生あんまり丈夫でないこの子を、無理に急いで高等學校に入れる氣はしない。前年の地震のどさくさまぎれを幸ひに、一年學校を休ませて遠く兄のゐる紀州の田邊へ遊ばせにやつたのも、實はさういふ意味からであつた。一體自分は世界中に今の中學ほど無用の教育を施してゐる處は

ないと心得てゐる。中學を出なければ高等學校へも専門學校へも行かれぬは愚か、氣の利いた給仕の試験さへ受けられぬ今の日本だから、餘儀なくこれに入れてはおくものゝ、こんな無用の教育を施す處におくよりも、生來初めて両親の膝下を離れて、見も知らぬ紀州の田邊あたりで一年遊んで来た方が、どれほど子供の教育の爲になるかも知れないと思つた。高等學校にしても亦然り。此處を通過しなければ大學へ入れぬから、いづれは高等學校に入れてやらうとも思つてゐるものゝ、何もそんなに急ぐことはない。一年入學は後れても、父と海外へ出かけた方が、いゝ教育になる――

こゝまで書いて來れば、いつそのこと、何もかも言つてしまふが、實は大學だつて強ひて入れるには及ばぬと思つてゐる。今の青年子弟の教育方針といふものは、中學に入らんが爲の故にのみ小學に入り、高等學校に入らんが爲の故にのみ中學に入り、大學に入らんが爲の故にのみ高等學校に入る。學齡に達してから大學に入るまでは、十四年間一日として準備教

育ならざるはない。そんならせめて大學だけは人間を完成するところかと思つたら、これもつまりは世間に出る迄の準備教育たるに過ぎぬ。その證據には、大學を卒業したばかりの者を、どういふ目に見ても一人前とはいひ兼ねる。一人前になるまでに尙多少の日時と努力が要るといふなら、大學の教育もやはり一種の準備教育たるに過ぎない。

大學令の第一條には「大學ハ國家ニ須要ナル理論及應用ヲ教授シ并ニソノ蘊奥ヲ攻究スルヲ目的トシ」云々と書いてある。それ故にこそ、その道の學者ばかりを教授にしてあつて、その學者が専攻した「蘊奥」を傳へる。それで學者だけを作るなら聞えてゐるが、これ一般の平民を作らうといふのだから、はき違へが起る。一般の平民に學問の「蘊奥」なんどいはししない。言ひかへれば、一人前の男にしてもらふに、何も博士を作るやうな教育はいらない。だから、大學は學者を作るだけにしておけばよいものを、たれもかれも大學生といはれたさに、我一と大學目かけて走る。走つて何の得るところぞと問へば、卒業して中途半端

の學者となり、一知半解の實務家となり、帯には短くたすきには長過ぎる人間ばかりが出て来る。

學者を作るべき處で學者にならずに生計の資を作らうといふのだから、卒業後すぐ物の用に立たずに、狼狽するのは理の當然である。高等學校を出さへすれば大學に入られ、大學を出さへすれば飯が食へると思つてゐるから、ひら几帳面に所定の課目を修了したといふだけの卒業生が、活字鑄造機の中から同じ形の活字が出て来るやうに、出て来る。特色も何もない同じやうなどんぐりが背くらべをして職を漁るのだから、職を求むる方でも、何大學の卒業といふ肩書の外に、何等個性の存在を認めしめる材料はなく、人を求むる方でも、同じ顔をして同じ着物を着た若者ばかりだから、いづれをいづれと定め兼ねる。その結果生れてから試験々と飽くほど試験を受けて來た大學卒業生を、又もやその上の試験にかけて、強ひてどんぐりの背くらべをやらせる。近頃諸方で行はれる諸會社の入社試験といふのが、即ち

それだ。

自分は子供を活字のやうに鑄造したくない。高等學校も結構だが、何も急いで健康を損ふには當らぬ。それよりも自分と一所に海外にでも出かけて、ゆつくりと退屈させてやりたい。この意味で誘つたら、船好きと物好きと兼ねた子供は、喜んで同行に應じた。

人の父なる自分は、自ら退屈せんが爲と、子供の試験の邪魔をせんが爲とに、いよ／＼船に乗ることに定めた。船と定めてから、子供にアメリカの一片を見せておきたいと思つたので、初はホノル、に行かうと考へた。ホノル、に行つて、ワイキ、の海岸で寒中の海水浴をやるのはさぞ面白からうと思つた。次には、マニラに行かうと考へた。椰子やびんろうじゆの茂つた常夏の國に、失せんとするスペインの面影と、來らんとするアメリカの趣とを一舉に見せ得ると思つた。雙方の船の發着を調べて見るに、どうにも日取の都合が悪い、兎や角と思ひわづらつてゐるうちに、郵船會社から大洋丸の事を知らせてくれた。

一月二日、夜行で東京を立つ。

三日、朝神戸に着。十一時長崎丸で長崎に向ふ。

四日、朝長崎着。長崎を見せてまはつて、温泉嶽の麓なる小濱の温泉に行つて泊る。

五日、小濱から温泉嶽に登り、温泉公園を一巡した後又小濱に下り、長崎に歸つて泊る。

六日、十二時大洋丸に乗つて長崎を出る。

三 たゞ二人の客

船が長崎の灣内を出はなれた頃、大洋丸の誇としてゐるA甲板のガーデンと水浴槽と運動室とを見に行つた。ガーデンは船長室の直ぐ後で硝子張の天井の下に、大きな樹を何十本か列べて、如何さま庭の趣を成してゐる。この立樹の間に椅子や卓子を列べてその脇に圖書室

の備がある。運動室にはさまざまの運動機械の備附があつて、その側に有名な水槽がある。水槽はこの船に限つたことでないが、これが下層の甲板にでもあることか、船の一番上のA甲板にあるのは、類例のないことださうな。これが爲に、これに水をはると船が頭重になつて、兎もすれば揺れ易いといふ。まさかとは思ふが、兎も角さういはるゝほど大きい。この太洋丸は舊名をキャップ・フィニスタといつて、ドイツから賠償船として取つて來たもので、排水噸數二萬二千、總噸數一萬四千四百五十七、日本で一番大きな客船である。何處を歩いてもがらんとして、船の中に人の氣はひがしない。それもそのはず。この船は長崎の船渠で近頃修理を終つて、いよく米國航路に就くことゝなつたのだが、命令航路の制限のあることゝして、長崎から直ぐ神戸横濱サンフランシスコと行くわけに行かず、何でもかんでも一應は手ぶらで命令航路の起點たる香港まで行かなければならないのである。だから初から貨物も乗客もあてにはせず、長崎から香港に直航して、香港にたゞ二日居て、直ぐ

横濱まで引ッ返すことになつてゐた。案内して呉れた加藤事務長の話によると、ケビンの乗客は私等父子二人だけで、外に三等客が支那人一人、日本人一人あるきり、二等には一人もゐないのださうだ。總勢四人の乗客でこの大きな二萬トンの船を完全に占領してゐる。この四人きりの爲に船内の電燈といふ電燈が一つ残らずついて、船内到處のヒーターが熱を通して、バーも開いて居れば、圖書室も開けてくれる、全くもつたないやうな氣がした。

かうして航海をつゞけてゐる一日の重油消費量が約三千圓で、これに船員の給與その他を日割にして勘定すると、一日五千圓に上るさうな。香港まで丸三日かゝるとして一萬五千圓これを乗客四人に割りあてると、一人前三千七百二十五圓につく。貨物の積込があんまりないから、少くともわれらは三千七百圓づつかゝつたお客であつた。

午餐の時分となつて、食堂へ出て見た。この食堂は船とも覚えぬほどに天井の高い壯麗な

もので、サンフランシスコ碇泊中などは、アメリカ人が舞踏會に借りに來るといふ。この大きな食堂は必ずしもわれら二人の爲に開いてゐるのではないが、われら二人の爲に給仕二人がついて、二等厨司が二人ついて、食事の献立は平生と同じく、ちやんと數々の料理をメニューに書き出してある。事務長と私等とたゞ三人で午餐をしたゞめてゐると、船の樂隊が、これも乗客がゐるようがゐるまいが、そんなことに頓着せずに、ちやんと奏するだけの曲目の樂を奏してゐる。——全くかういふ旅は恐らく私の一生に二度と出來まい。

昔は人形を聴衆に見立て、法を説いた和尚があつたさうだが、人が居る居ないに拘らず、するだけの事は委細かまはずして行くところに「人知らずしていきどほらす」といふやうな意氣がある。お客がゐないからとてバーを閉ぢ、喫煙室や圖書室を閉ぢ、食堂の献立を省き樂隊の奏樂を見合せるなら、その同じ理論を擴充して行くと、船長は浴衣がけて船橋に立ち事務長は寢衣のまゝで帳簿をひねくり、給仕が日本服の着流しで食事を運び、電話交換手が

寢そべつたまゝで電話をつなぎ、甲板の砂洗ひもなければ、客のゐない船室の掃除もすておいて差支ないといふ結論になつて來る。浴衣の船長、寢衣のまゝの事務長などは考へるだけでも可笑しい。法律は人に知れないなら犯してもいゝといふ譯のものでないことを、適切にこの船はわれらに教へた。

空が曇つて寒くなつて來たので、喫煙室に入つた。こゝの喫煙室にはイギリス風の暖爐が片隅にしつらへてある。われら二人の爲にとて、係のボーイは火を焚いてくれた。もえあがる焰を見ながら話してゐると、何とも知れぬのどかな心持になつた。そのうち話が盡きてうと／＼として來る。

曇つてゐた空はいつしか雨になつて、波が追々に高くなつた。船がゆれるにつれて生欠が出て來る。酔ひ心地の始まりと知つて、逃げるやうに船室に下りた。五島沖から船の動搖がますます／＼烈しくなつて、水の音が物すごく聞える。二人とも晚餐をたべずに一風呂あびたま

までベッドの中へもぐりこんだ。この調子で三日も荒れられてはかなふまいと心配しながら寝てしまった。後で聞くと、その夜はひどい降であつたさうな。あくる朝おそく目をさますと、空はからりと霽れて波は全く静つてゐた。文も元氣が出て湯に入らうといふので、二人はいう／＼と朝湯に暖つた。食堂へ出る時間に後れてしまつたから、部屋へサンドキッチと番茶を取り寄せて、寝衣のまゝでむしやくとたべた。昨晩たべなかつたのだから、その茶がいはうやうなく旨い。喫べてしまつたところで、さてこれから學校に行くでなし、社に出るでなし、何をしなければならぬといふことが何一つない。これが無上に嬉しい。

四 ベル

他に乗客がないので、われらは昨日から、立派なスキート・ルームに入れられてゐる。疊

敷にして二十疊も敷ける位の大きな室で、奥の隅に船らしくない大きなベッドが二つ列んで、その側に化粧臺やたんすが立つてゐる。ドアを開けて入つたとツツきの窓ぎはに、ソファとデスクがあつて、外にテーブル一脚と椅子が四脚ある。ベッドの横から更に奥の方のドアを開けると、そこが浴場になつてゐる。これだけのことなら、たゞスキートになつてるといふだけだが、室の用材でも調度でも敷寄を凝して、天井は一枚板の美しい木を使つてある。この一室の中に電燈が十五個もついているさへあるに、ベルが寝臺に一つつ、入口のドアの影に一つ、化粧臺の側に一つ、ソファの上に一つ、衣裳だなの側に一つ、都合六個あつて、その上浴場に一つ、その又上に、デスクの横に電話機が一つある。

この船が初めてドイツで出来た時、カイゼルは大の得意で、戦争がすんだらこれに乗つて世界周遊をやらうと言つてゐたさうだ。カイゼルが乗つたとすれば、さし當りこの私等の船室に泊つたことだらうが、いくら人使ひの荒いカイゼルにしたところが、この小さい室に六個

のベルと一個の電話機は多すぎる。

しかし又考へた。私は前年太平洋航海中急病が起つて、非常に苦しんだことがある。ボーイを呼ばうとして、上の寢床から梯子を下りたままでは無事だったが、ドアの側にあるベルに手がとどかないので、そこまで這つて行くうちに氣を失つてしまった。さういふ時こゝほどベルが多かつたら、失心しない前に、ボーイが呼ばれたらうにと思つた。

しかし又考へた。昔ロンドンで下宿を探しに行つた時、或る家で氣に入つた室が見つかつた。しかし其處にはベルが一つもついてゐなかつた。ベルがなくては困るといつたら「宅の雇人は、毎日しなければならぬことだけ、ちやんと自分でしてしまひますから、ベルの必要はありません」とのことであつた。なるほどその家に宿を定めて、二月ほど居つた間に、一度もベルで人を呼び立てなければならぬことはなかつた。

さういふ點からいへば、ベルの数の多いのは結局サービスが悪いか、召使の氣が利かない

か、いづれかを示すやうにもなる。しかしわれらが十餘日の航海の間ほとんどこのベルの必要はなかつた。われらの部屋についたボーイは、鶴見祐輔君のやうな顔をした氣の利いた若い男であつた。

○

甲板に出て見ると、春のやうに暖かい。臺灣海峡に近づいたのだと分つた。

この日の午餐は船員とテーブルを同じうした。腹の加減がまだ尋常でないので、お茶づけを二杯ばかりかきこんですませた。船に酔心地の時お茶づけほど有り難いものはない。どんなに食慾のない時でもこればかりはのどを通る。前年大西洋で十日荒れ続けられた時、食事の時間が来て食堂に入ると、入つたばかりでむか／＼として来た。十日何も食はずにゐるわけに行かぬから、ドロップスのやうな菓子を斬髪屋から買つて来てこれをしやぶつて居た。酔

つた時はイノス・フルト・ソルトがいよと教へてくれる人があつたので、買つて飲んで見たが、格別の效能はなかつた。こんな時にお茶づけがたべられたらと思つたが、何分アメリカの船でお茶づけを求むるのは、木によつて魚を求むるより難い。私は全く文字通りに茶づけに渴した。

食後は子供と甲板でピンポンをやつたが、幾度やつてもまける。いま／＼しいから輪投をやつて見たが、これも負ばかり續いた。しみ／＼とジエネレーションの移り行く様を見せられた心地がする。子供とこんなことをして遊ぶのも何年ぶりであつたらうか。

あんまり暖かいから、甲板に椅子を出させて、寝そべり返つて書を読む。讀書に飽いては輪投をやり、輪投にまけては甲板を歩きまはる。父子二人で二萬トンの巨船を占領したやうなものだから、傍若無人を通り越して、正に傍若無人である。

四時半にお茶が出た。茶を喫した後甲板を歩いてゐるうちに、日が暮れた。夕食後は喫煙

室で骨牌でも取るところだが、相手がないから、早く船室に歸つて湯に入つて八時頃に寝た。波靜かにして船が動いてゐるともわきかぬる位であつた。

八日は朝から雨が降つて波は靜かであつた。本を読んで見たり、物を書いて見たり、文と輪なけをして見たり、何一つこれといふこともせず一日を暮してしまつた。これほど無爲に暮し得たことも珍しい。初めて永い間の望であつた退屈らしいものをして見た。知らぬが佛の四宮船長からしば／＼「退屈でせう」と慰められた。

この夜夕飯がすんで後、喫煙室で船長から麻雀を教はる。私と文と船長と森水機關長と四人で、加藤事務長がわれらの後見をして呉れる。百聞は一見に如かず、いくら獨案内みたいな書物を読んでも腑に落ちなかつた事が安々と分る。クンカンと花合せとをませて、花合せよりももつと出來役を多くしたものと思へばいよ。

五 入 港

九日の朝甲板に出て見ると、右舷に島が見える。支那の畫にあるやうなとけくした恰好をしてゐる。島の形までが日本とは違つて來たと、子供が喜ぶ。

地洋丸がのし上げて二つに割れたといふ琅玕列島を過ぎて後、間もなく遠く香港の入口の岩へ入港の目標につけた白ペンキが見える。船橋に登つて見る。丁度水先案内の上船したところであつた。この水先案内はでっかいと太った支那服の男で、船長に何やら書面を渡して船の指揮を引き取つた。船橋の上は入港間際に見せる非常な緊張ぶり、船長以下運轉士の面々いづれも雙眼鏡を眼におしあて、傍目もふらず、無駄口も利かない。船長も昨晚麻雀の勝負を争つてゐた時とは以ての外に違つて、外套に包まれたあの大きな姿が威容堂々として四邊を壓して見えた。

水先案内の何とも解しかぬる號令と、これに答ふる、これも何とも解しかぬる聲が、鳴を

しづめた船橋の上に傳はる。スターボード（とりかち）が「スタード」で、ミッドシップ（舵中央）が「ミチップ」だから分らう筈がない。日本の海軍には「ヨーツロ」といふ號令がある。「宜しく候」の略で「ステヂー・シー・ゴース」の意味といふ。聞いてゐると、水先案内がのつたりした調子で「ニーゼム」といふことがしばしばある。あんまりよく出て來るので、船長に聞いて見たら、「ニーゼム」ぢやない「イーゼム」だといふ。その「イーゼム」が依然として分らないから聞き質すと、「イーゼム・ヘルム」の轉で、舵を戻せとの義とある。

運轉士の方への號令はまだ少し分り易い。「ストップ・ボート・エンチン」と馬鹿に「エンチン」の尻を上げて發音すると、若い運轉士が齒ぎれよく「ストップ・ボート・エンチン・サー」とこれも「サー」の尻をあけて答へる。後で聞いたことだが、「ボート（おもかち）」といへば、舵機の手を右にまはして、船は左に向く。スターボード（とりかち）といへば、その反對になる。即ち船の方向と舵機の手は、いつも反對になるのだから、命令と、舵と、船と

がヘーゲルの哲學みたいになる。これが爲に見角間違が起り易いが、何分永い間の習慣で、思ひ切つて何處でも改革を唱ふる者はなかつた。その改革を一番に實行したのは、何事にも人に先つてかはつたことをやつて見たがる米國の海軍で、今から十年ほど前、この號令を「右舵」「左舵」と云ひかへて、右舵といへば、右へ車をまはして船も右の方へ向くことになつた。便利は便利になつたものゝ、これは海軍だけに行はれて商船に通用せぬから、商船と軍艦と協同作業をする戦時には、ヘーゲルの哲學のシンテシスが抜けたやうなものになりはしないかと心配してゐる者がある。

船長から眼鏡を借りて見ると、船はしづ／＼香港島と九龍の間に入つて行く。香港の家々は變にがらんとして蜂の巢の列んだやうに見えたが、近づくまゝに能く見ると、暑い土地とて、どの家も／＼各階に廣いベランダを取つてゐる爲と知れた。さういふ蜂の巢のやうな家が海岸から始まつて、二千尺近いビクトリア・ピークの邊まで續いて見える。ピークを見

て始めて香港へ来たといふ氣持がする。海外の旅行は自分にとつて今度が九度目で、そのうちヨーロッパへは三度も出かけたが、いつもシベリアかアメリカまはりで、香港は今度が初めてだ、これでもイギリス領だと思ふと、何だか西洋臭い香が鼻を打つて來るのを覺える。

六 香港の棧道

九日の午前十時二十五分に久しぶりで、海外の土を踏んだ。船まで迎へに來てくれた郵船支店の上村廣治君が兎に角支店長の宅へ行かうといふので、三人は例のかち梅の長いチェアに乗つて、えつちらおつちら坂道を登つて行く。日本の寒中ではあるが、此處には落葉した樹が一本もなくて、亞熱帯の緑濃い植物が兩側に藎々として茂つてゐる。椰子、榕樹、棕櫚などの間に、目のさめるやうな芙蓉の赤い花が、こゝにもかしこにも咲き亂れて、丁度日本の五月頃の暖かさ。空はどんよりと曇つてゐるが、それが一向苦にならない。

支店長の宅は山の中腹にあつて、香港の港内が一目に見下される。乗つて来た太洋丸が眼下に見える。こゝでスリングといふ若い支那人に紹介される。郵船のコムブラドルをしてゐる人で、アメリカに生れてアメリカで教育をうけたといふ。恐しく達者な英語を話す。われらの島内見物に通譯をしてもらふ爲呼んで来たのである。この人自身を呼びかけるに「ミスタ・ソージンカン」といふ。それで思ひ出したが、前年李烈鈞氏が日本に来た時、友人を介して揮毫を頼んだ。友人がこれに私の名を入れてくれといつたところ、「楚人冠などと、そんな失禮な名は入れられない」と断つた。なるほど、この名は自ら名乗つて出るには差支ないが、支那人から呼んでは失禮と見えるかも知れないと思つた。

四人づれ自動車で此處を出た。植物園に行つて見る。緑濃い熱帯植物の中に八重の白つばきの花が今を盛りと咲いてゐる。如何にも春めかしい。このつばきの花を見て、春めかしい心もちになつた。けれども、わざわざ香港まで来た甲斐があつた。

植物園から坂を下り、曲りくねつて長い／＼クァンスロードを西の方へ走る。病院やら大學やらの建物を横に見ながら、ピークの西の麓を通り過ぎて、香港島の裏側へ出た。アバードーン灣の波打際に車を驅つて深海湾からリバルス灣へぬける。初夏の暖かさの風に吹かれて、心に何のわだかまりもなく、見晴しのいゝ濱邊に車を驅るの快は、何物のこれに比べべきものもない。行く／＼上村君とスリング君とがかにかくと説明して呉れる。リバルス灣ホテルで少憩して、今度は道を東に取つて、くるりと島を一まはりした後又ピークの方に登り、ピーク・ホテルでお茶にした。此處を出て、少し山の方へ登つて見ようとなつた。丁度ピークのすぐ下の岨に沿つて棧道が出来てある。香港の町から見上げると、この棧道がうねうねと山の腹を繞つたのが白く見える。白いペンキぬりの木柵を山道の端へしつらへたものだらうと思つてゐるが、来て見ると、見る目もくるめくやうな断崖にコンクリートの脚を何丈かの高さに築いて、棧道はその上につき出してある。一通りの工事ではない。その上、道

はアスファルトで固めて、その道が上から流れ落ちる雨水や何かの爲に下の泥を流されぬやうにと、凡そ雨でも降つたら、小さな溪流になつて水の流れ落ちさうなと思はるゝ限の、凹地といふ凹地は、ことごとくコンクリートで固めてある。棧道の白く見えるのは、如何さま白ペンキを塗つたに相違ないが、塗られた柵は頑丈な鋼鐵で、十人や二十人の人間が押したとて突いたとてびりッともするやうなものでない。よく日本の山道で見ると、粗末な弱々しい木柵でない。

こゝにイギリスがあると思つた。香港がイギリスの領土となつたのは阿片戦争の結果であること、今さら事新しげに説くまでもないが、その阿片戦争なるものは必ずしもイギリスにとつてクレヂタブルなものではなかつた。兎もすれば、イギリスが印度の阿片を支那人に飲ませようとして飲ませ損ねた腹のせに起した非人道的な戦争であるやうに言はれる。これをイギリスでもさすがに氣にして、機會のある毎にそんな意味の戦争ではなかつたことを辯明

しようと努める。阿片禁止の命はイギリスでもちやんと承知してゐた。たゞ廣東にゐるイギリスの阿片商人と阿片との處分に關して、支那當局の態度がけしからぬものであつた。のみならず、支那當局が嘘をついたり、約束に背いたり、一向要領を得ないので、とう／＼堪忍の緒が切れて、最後の手段に訴ふるに至つたのだといふやうに辯明してゐる。

この辯明の當否は今こゝに審査を加ふる必要を認めない。たゞこの戦争にイギリスが勝つて、その結果講和條件のおもなるものゝ中に、南京漢口その他の開港と香港の讓與とがあつたのだと分ればそれでいゝ。これが千八百四十二年のことで、今から約七十年前に當る。イギリス人の辯ずるところに依れば、英國は一たびも香港の割讓を強要したことはない。さういふ意味を諷したことさへない。支那政府が自から進んで贈與して呉れたのだといふ。兎に角、この時の講和條件中には、支那が不法に差押へた阿片の賠償と英國軍隊の派遣費用とを合せて、償金六百萬ドルを六個年賦に支拂ふことゝ共に、香港島を永久英國の領土たらしむ